

ラテンアメリカ時報

INFORMACION
LATINOAMERICANA

No. 1415

特集:ラテンアメリカ スポーツの世界

2016年 夏号

ニカラグア・カリブの野球事情

「野球移民」から浮かびあがるドミニカ共和国の社会と文化

ブラジルサッカー事情

柔道 日本とブラジル

アルゼンチンにおけるラグビー事情

日野自動車のダカールラリーへの挑戦

「下町ボブスレー」の挑戦とジャマイカ

ラテンアメリカ時事解説

ペルー大統領選挙とクチンスキ一次期政権の展望

ブラジル ルセーフ大統領弾劾の今後

中米地域統合SICAと“地域公共財”的創造

連載・読み物

歴史、図書案内

ほか



特集：ラテンアメリカ スポーツの世界

| | | |
|-----------------------------|-----------------|----|
| ニカラグア・カリブの野球事情 | サウル・アラナ・カステジョン | 2 |
| 「野球移民」から浮かびあがるドミニカ共和国の社会と文化 | 窪田 晓 | 5 |
| ブラジルサッカー事情 | 宮川 直也 | 8 |
| 柔道 日本とブラジル | 浅賀 健一 | 11 |
| アルゼンチンにおけるラグビー事情 | 藤田 倖郎 | 14 |
| 想いは海を渡り、南米の大自然を駆け抜ける | | |
| 一日野自動車のダカールラリーへの挑戦 | 日野自動車ダカールラリー事務局 | 17 |
| 冬季五輪を目指して何度も立ち上がる！ | | |
| 「下町ボブスレー」の挑戦とジャマイカ | 奥山 瞳 | 20 |

駐日ラテンアメリカ大使インタビュー <第20回 ドミニカ共和国>

| | | |
|----------------------------------|-------|----|
| エクトル・パウリノ・ドミンゲス・ロドリゲス駐日ドミニカ共和国大使 | | |
| ラテンアメリカで最も成長率の高い国 | | |
| —国民の現政権支持率は史上最高— | 伊藤 昌輝 | 24 |

ラテンアメリカ時事解説

| | | |
|-------------------------|--------|----|
| ペルー大統領選挙とクチンスキ一次期政権の展望 | 中川原 拓海 | 28 |
| ブラジル ルセーフ大統領弾劾の今後 | 木村 元 | 32 |
| 中米地域統合 SICA と“地域公共財”の創造 | 米崎 紀夫 | 35 |

33カ国リレー通信<第35回 パラグアイ>

| | | |
|---------------------------|-------|----|
| 日本人移住80周年を迎えたパラグアイそして日系社会 | 田中 裕一 | 38 |
|---------------------------|-------|----|

ラテンアメリカ随想

| | | |
|-----------------------------|-------|----|
| ブラジル | | |
| リオデジャネイロ・オリンピックを機に国際スポーツ大国に | 山下 日彬 | 41 |

新連載 ラテンアメリカ都市物語<第1回>

| | | |
|------------------------------------|------|----|
| ラパスとエルアルト市（ボリビア）—ロープウェイが結ぶ2つの高原都市— | 綾部 誠 | 44 |
|------------------------------------|------|----|

ラテンアメリカ参考図書案内

桜井 敏浩

| | |
|--|----|
| 「野球移民」を生みだす人々 ドミニカ共和国とアメリカにまたがる扶養義務のネットワーク | 10 |
| コロンビアの素顔 16 / ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の構築 —「ブラジル人らしさ」をめぐる葛藤と模索 | 22 |
| マプチエの女 23 / 南米「棄民」政策の実像 27 / 水を得た魚 マリオ・バルガス・ヨサ自伝 | 27 |
| リオデジャネイロという生き方 —不安も悩みも笑顔に変える「幸福の個人技」 | 43 |
| 創造か死か —ラテンアメリカに希望を生む革新の5つの鍵 48 / アンデスの自然学 | 48 |
| 物が落ちる音 49 / ブラジル雑学事典 | 49 |



■ 表紙写真 オリンピック関連施設の多いリオスルからコパカバーナ海岸に向かう
自動車トンネル（「ラテンアメリカ随想」41頁参照）
撮影・提供：山下日彬 Yacon 代表（リオデジャネイロ在住）

■ 描絵 制作・提供 野口 忠行（福岡県大川市在住。長年ペルー、アンデスに赴き生活する人々を題材に描いている。）
■ 表紙デザイン 太 公良 グラフィックデザイナー

特集 ラテンアメリカ スポーツの世界

今年はリオデジャネイロで8～9月にオリンピック・パラリンピックが開催されますが、それら競技種目だけではない、ラテンアメリカでいま行われている多様なスポーツ最新事情にもご注目下さい。

ニカラグア・カリブの野球事情

サウル・アラナ・カステジョン

ニカラグアで最も人気のあるスポーツは野球である。日本でも相撲に次いで重要なスポーツは野球である。またキューバをはじめパナマ、ドミニカ共和国、ベネズエラ等カリブ海に面する国々において最も盛んな国民的スポーツは野球である。これらの国における野球の歴史をひも解くと、地理的には遠く離れていても、文化的な嗜好という点では極めて近いものがあるということが分かる。

野球が正式に成立してから数年後にはすでに米国人によってわれわれの国々に伝えられ、その後、1888年に商人アルバート・アドレスバーがニカラグアのカリブ海側にあるブルーフィールズ市のクリケット選手たちに野球を紹介し、そのルールを教えた。アドレスバーはニカラグアの南部に「南部野球クラブ」、そして北部に「ホワイト・ローズ」というニカラグアで初めてのチームを結成した。

似たようなことが中米・カリブ地域でも起こった。パナマでは1850年頃米国企業の役員や技術者が担当した運河鉄道の建設とともに野球が始まった。キューバでは1871年頃、ベネズエラでは1890年頃、いずれもニューヨークから帰ってきた大学生が始めた。ドミニカ共和国では1886年頃、キューバの第一次独立戦争（1868～78年）から逃ってきたキューバ人亡命者によって始められた。

ニカラグアにおける野球の変遷：エリートのスポーツから大衆のスポーツへ

ニカラグアの太平洋岸における野球はもともと時間とカネに余裕のある若者のスポーツであった。したがってスポーツの技術を磨くというより社交的な要素が強く、試合も一過性の娯楽であったため、その結果についてほとんど記録は残っていない。

1891年、アドレスバーがカリブ海側で野球を始めてから間もなく、米国から帰国したニカラグアの学生たちが首都マナグアで練習を目的とした「レクリエーション会」というチームを結成した。報道記録によれば本格的な野球チームは1901年に結成された「マナグア・ニューヨーク野球クラブ」で、その後1905年に「ボーエル」というチームができた。この名称はニカラグア駐在の米国領事ドナルドソンが英國軍と戦うアフリカの種族に敬意を表してつけたもので、首都の職人や労働者によって構成されていた。

ここでも野球の普及は太平洋岸の重要な町々とコリント港を結ぶ鉄道の建設とともに進んだ。このように国内のエリートによって“輸入”されたスポーツである野球は徐々に変貌した。20世紀に大衆化した結果、ドミニカ人口ベルト・クレメンテのような庶民出身の真のヒーローが誕生する。そして1991年7月モントリオール見本市でのロサンゼルス・ロジャーズとの試合でラテンアメリカ人として初めて“完全試合”を達成したニカラグア人投手デニス・マルティネスのようなラテンアメリカ人が誇りとする成功物語も誕生する。

1924年、コスタリカで行われた中米オリンピックに



ダニエル・オルtega大統領臨席のもとに行われた少年野球スタジアム落成式



初めて世界大会に参加したニカラグア代表チーム（1939年ハバナにて）

参加するためニカラグアでもナショナルチームが結成される。1930年には全国スポーツ委員会が初めて正式に全国レベルのリーグを組織、政府も関与することとなり、野球のルールも決められた。1932年には最初のリーグ戦が行われ、「ボーエル」を始めとする太平洋岸のチームおよび初めて首都に遠征したカリブ海側の「ネイビー」などが参加した。

70年代にはニカラグア人プロモーターであるカルロス・ガルシアの粘り強い努力もあってプロ軍団が育成され、後に彼らは大リーグに所属した。ガルシアはニカラグア・アマチュア野球連盟(FENIBA)の会長として、50年代および60年代の「カリブ・リーグ」に倣い、アマチュア野球一部リーグを組織し、その中にはのちにニカラグア・ナショナル・チームの選手としてキューバ、メキシコ、プエルトリコ、パナマおよびベネズエラ等の錚々たる選手と肩を並べるスターたちが誕生した。その時、5人のニカラグア選手が大リーグ入りを果たした。太平洋チームのデニス・マルティネス、トニー・セベス及びポルフィリオ・アルタミラノ並びにカリブ海側のアルバート・ウイリアムスおよびデビッド・グリーンである。

そしてまさに同じ70年代、1976年に山本栄一郎氏を団長とする日本の代表チームがニカラグアとの親善試合のためにやって来た。もっとも、それ以前にも1972年11月末に「ニカラグア親善72」と命名され、マナグアで実施された第20回アマチュア野球世界選手権に日本代表もカルロス・ガルシアの招きに応じて参加している。同大会にはカナダ、キューバ、台湾、米国、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ドミニカ共和国、イタリア、日本、ニカラグア、パナマおよびプエルトリコが参加した。

72年の世界選手権に参加するためニカラグアを訪問した日本チームは、小田義人、橋爪昭二、船見信幸、古川義弘、古屋英雄、蓑輪努、中村裕二、新美敏、大場勝、鈴木博昭、高田新次、辻哲也、植松清春、山

田智千、山本好宏、細川昌俊、池田善吾、池谷公二郎、石川勝正および榎原良行によって構成されていた（注）。ピッチャーの池谷公二郎は野球ファンにセンセーションを巻き起こした。ニカラグア人のスポーツ記者がいみじくも述べたように、コージローは東洋から敗北をもたらした。彼の投球は目にも止まらず、ニカラグアのナインはきりきり舞いさせられ、まさに電光石火のごとく容赦なく叩きつけられた。この時、ニカラグアは日本チームに手も足も出せずに終わった。

1972年12月、ニカラグアの首都マナグアが大地震に襲われた。国立スタジアムは辛うじて地震に耐えたが、国も野球も大きな打撃を被った。地震の後、サンディニスタ国民解放戦線(FSLN)によるソモサ独裁政権打倒の動きが急速に高まり、79年7月19日遂にソモサ政権は倒れた。

80年代には内戦による被害等もあったが、野球は国民的スポーツとして発展し続けた。その頃、ニカラグア史上初の全国野球選手権大会が開催された。この大会は野球を愛し、かつプレーしていた反ソモサの闘志である著名なサンディニスタに敬意を表してヘルマン・ポマレス・オルドニエス大会と呼ばれた。この大会は全国の野球ファンの注目を集め、ほとんどすべての県から18チームが参加し、選手もほぼ全員ニカラグア人であった。

90年代および2000年代初めには野球は勢いを失ったが、時の政府も特に関与しようとはしなかった。ニカラグア国民の熱意といくつかの企業のFENIBAへの支援によりなんとか命脈を保った。05年にはグラナダ、サン・フェルナンド（マサヤ）、ボーエル（マナグア）、レオンおよびティグレス（チナンデガ）のチームが参加するプロ野球結成が日の目を見ようとしたが、この試みも指導者間の内紛や資金不足のため長続きはしなかった。

... Garcia viajó a Japón para invitar
dar en la XX Serie Mundial de Béisbol



Miembro del equipo de béisbol de Japón en Nicaragua



Jugadores del equipo de béisbol de Japón durante
la Serie Amistosa con la Preselección de Nicaragua, 1972

ニカラグア駐在米海兵隊野球チーム
新聞報道より（1914年12月16日）

09年以降今日までダニエル・オルtega政権および民間部門のFENIBA支援により野球は再び息を吹き返している。国内が一致協力してこのスポーツの再編成が行われ、青少年レベル並びにプロのレベルでの振興および新しいスタジアムの建設に資金が充てられている。

今日のニカラグアでは野球は再び新たな酸素を吸った。あらゆるレベルの大勢の人々がプレーしている。4チームから成るプロのリーグ、7チームから成るスーパーリーグ、少年リーグ、各県のリーグのほか、全国に各地区のリーグが存在する。

国際レベルにおいてもニカラグアは現在再び野球の国として認められている。野球は単に庶民の娯楽であるのみならず、ニカラグア人に精神の高揚と、誇りをもたらすとともに、ニカラグア人の文化と気質の一部を形成する特別なスポーツなのである。われわれはこのスポーツの実践において長い道程を辿ってきた。われわれは、ニカラグアが遠からずワールド・ベースボール・クラシックやカリブ・リーグのような国際試合において活躍するために必要な質的飛躍を遂げるであろうことを信じて疑わない。

ニカラグアと日本の今後の展望

ニカラグアと日本は友好の絆を強める手段として野

球というものを持っている。両国は2世紀以上にわたってこのスポーツを楽しんできた。日本は規律正しい練習によって質の高い野球を開拓した。それは世界の称賛の的であり、国際試合において実証されている。ラテンアメリカでも質の高い野球をプレーしているが、日本との違いはわれわれの最上の選手はメジャーリーグ(MLB)にいるということである。デニス・マルティネスが1976年にボルチモア・オリオールズに入団した後、さらに13人のニカラグア人選手が米国の最高レベルのプロ野球球団に所属している。最近ではチエスラー・カスパートが2015年中頃にカンザスシティ・ロイヤルズに入団した。

日本の野球は技術的に急速に進化した。日本選手の優秀さはどこからくるかと言えば、それは規律正しさ、選手が互いを尊重し合うプロ意識、チーム・プレー、そして日本人としての誇りである。日本では我々の国々で往々にして見られる個人プレーは奨励されない。

先進国である日本はわれわれの国々に比べ野球に対してより多くの資金を投入することができる。ラテンアメリカでは最高の選手はより良い収入を求めて国外に出るため、国内のチームの安定性は損なわれることとなる。その例外として大リーグへの移籍を規制している国もあるが。

スポーツは団結という要素をもつ。野球は我々を近づけ、国家間の協力と関係緊密化のチャンスを提供する。野球を愛好するという血を受け継ぐ国民にとっては、その夢は実現可能である。その高い理想の達成はわれわれの精神のうちに宿っている。侮れる相手はどこにもいないが、バットとボールさえあれば、闘志を燃やし不可能と思われることも可能にすることができる。

野球が日本とラテンアメリカの関係をさらに緊密にしてくれることを願っている。日本のチームと中・南米のチームの親善試合を奨励したい。野球への情熱は、われわれの間の地理的距離を縮め、ラテンアメリカと日本の統合、交流および補完関係の強化に資すること疑いなしである。

（S.E. Sr. Saul Arana Castellón 駐日ニカラグア共和国大使）
(協会副会長 伊藤 昌輝 訳)

(注) Juarez, B. (2006). Japón y Nicaragua. Contribución a la historia de sus relaciones diplomáticas.

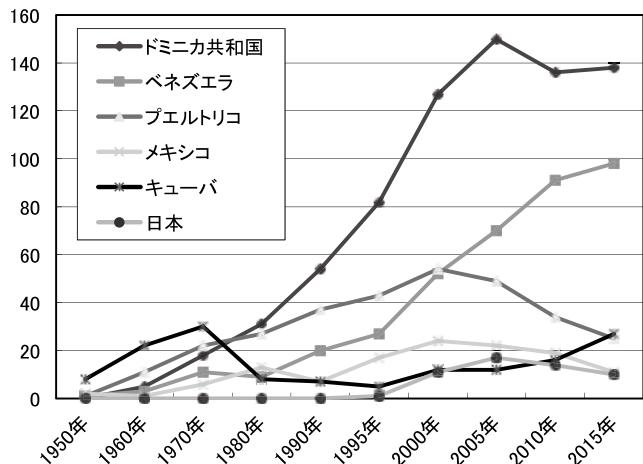
「野球移民」から浮かびあがる ドミニカ共和国の社会と文化

窪田 晓

ドミニカ共和国（以下、ドミニカ、図1）は、米国のメジャーリーグ・ベースボール（以下、MLB）に多くのプロ野球選手を送りだす国として知られている。現在、MLBに所属する大リーガーのうち外国出身選手の割合は30%を超えており、とくにカリブ海地域を中心としたラテンアメリカ出身選手の割合は大リーガー全体の26%にものぼっている。そのラテンアメリカ出身選手のなかでもとりわけ存在感を示しているのが、ドミニカ出身の選手たちである。2015年のシーズン終了時点では、138人と大リーガー全体の11%を占め、外国出身選手のなかでは第1位の数字である。ちなみに、2番目に多いのがベネズエラの98人、3番目がキューバの27人となっている（図2）。

一方、国内のプロ野球界でもカリブ海地域出身の選手が増加しており、外国人選手=米国出身という図式は過去のものとなりつつある。また、13年に開催された第3回WBC（ワールドベースボール・クラシック）でドミニカが優勝したこと、野球強豪国として一般にも知られるようになった。しかしながら、なぜドミニカからこれだけ優秀な選手が誕生するのかという点については、貧困から抜けだす手段であるという表面的な理解にとどまっているのが現状である。そこで、本稿では野球がドミニカの社会や文化といかに密接に関わり発展してきたのかを現地での調査結果をもとに明らかにしておきたい。

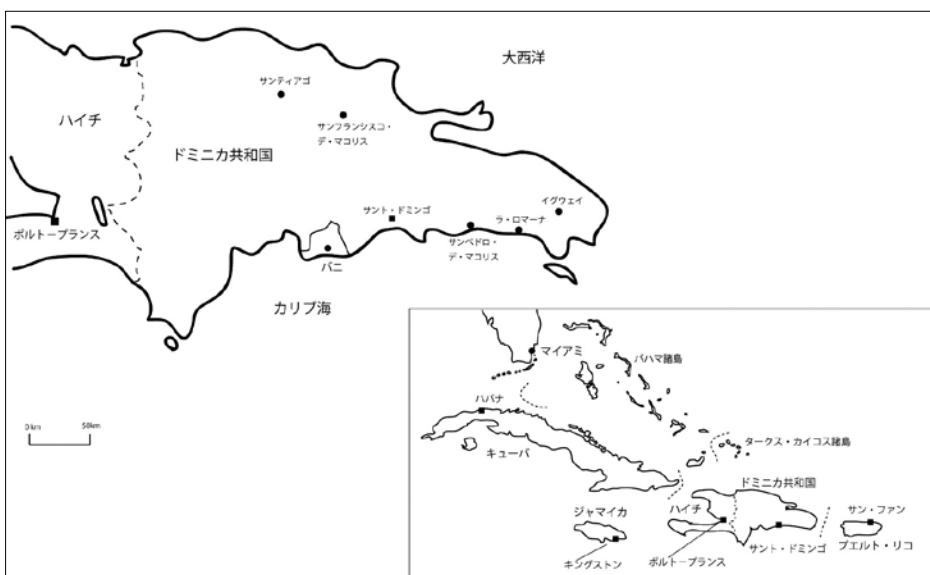
図2 MLBにおける外国出身選手数の推移



(Baseball Reference.com をもとに筆者作成)

米国との関係

19世紀後半に伝播した野球が最初に浸透したのが、ドミニカ南東部のサンペドロ・デ・マコリスである。サトウキビ・プランテーションで働く労働者の娯楽として広まり、米国資本による製糖工場の買収がすすむと競技人口は急速に拡大する。さらに1916～24年の米国による軍事占領時代を契機として、アマチュア野球の発展にあわせて次第に熱を帯び、製糖会社のオーナーは、優れた選手を工場のクラブに引き抜くようになった。サンペドロ・デ・マコリス周辺からは、これまで多数の大リーガーが輩出しているが、それは比較

図1 ドミニカ共和国地図
(筆者作成)

的はやい段階から製糖業が栄えたことにより、野球の発展に不可欠な資本提供者（パトロン）が数多く存在していたことが理由としてあげられる。

ドミニカがプロ野球選手の供給地になるきっかけは、59年に起きたキューバ革命である。米国との国交が断絶したことにより、それまでMLBに大リーガーを供給してきたキューバからは、正式なルートによって選手が輩出されることはなくなった。そこで、MLB球団のスカウトはおなじカリブ海地域にあるドミニカに目を向けるようになったのである。キューバ革命の直前にはじめての大リーガーが誕生していたこと、トルヒージョ暗殺後にアメリカ軍による2度目の軍事介入（65年）を経験したことにも追い風となった。

このように、ドミニカで野球が浸透していく過程には、そのときどきの国際情勢、とりわけ米国とドミニカのあいだでの政治、経済、文化の領域における力関係が密接にかかわっていることがわかる。

選手発掘・養成施設

現在、ドミニカにはMLB全球団と日本の広島東洋カープがベースボール・アカデミー（以下、アカデミー）を所有している。MLB球団が、アカデミーを設立した背景には、球団数の拡張にともなう選手数の絶対的不足とFA制度の導入による選手年俸の高騰にくわえ、外国出身のマイナーリーガーに対する就労ビザ割りあて数の制限があった。そこで各球団はビザの必要のないドミニカ国内にマイナー・リーグ組織としてのアカデミーを置き、能力のある選手だけをアメリカに連れてくるという方法をとるようになったのである。アカデミー設立を機にドミニカ出身の大リーガーの数は、一気に増大していることがわかる（図2）。

アカデミーと契約できるのは、17～21歳までの少年である。契約金は、日本円にして20万～1億円にまでのぼり、少年の家族や出身地域の社会に大きな影響をおよぼしている。契約後、選手たちは、アカデミーでの合宿生活を送ることになる。そこでは食事やトレーニングだけではなく、英語の授業までがおこなわれており、ドミニカ国内に米国的な選手発掘・養成施設システムが移植されたとみることが可能である。これは世界の中核地域から周辺地域に製造拠点を移してきた世界経済の構造と見事に一致する形態で、ドミニカ政府が誘致したフリー・ゾーンの野球版ともいえる。つまり、現地で安価な原材料（少年）を調達し、工場（アカデミー）で会社（球団）が選別し、加工を施し（コ



バリオの路上で野球に興じる少年たち、ドミニカ共和国バニにて（筆者撮影）

ーチング）、米国の中堅にあった製品（選手）だけを送りだすという形態が、現在のトランクショナルな経済活動の究極の姿をあらわしているからである。

移住の文化

1960年代なかばにはじまった米国への移住は、現在も増加をつづけている。人口10,528,000人（2015年、世界銀行）のうちアメリカに暮らす移民の数は、1,414,703人であるが（10年、米国国勢調査）、統計にはあらわれない非正規滞在者の数をふくめると、実数は200万人以上と推定されている。これにくわえ、スペインやベネズエラ、パナマやペルト・リコなど米国以外の地域に暮らす移民をあわせると、人口のおよそ3分の1にあたる300万人近いドミニカ人が海外で生活していることになる。彼らからの送金額は、日本円にして年間3,000億円にまでのぼり、ドミニカがいかに移民からの送金に依存する社会であるかがわかる（12年、ドミニカ中央銀行）。

ドミニカが移民送り出し社会になる理由として、経済が米国資本に依存することによって国内市場の成長は必然的に妨げられ、貧富の拡大を招いたことや農業政策の失敗が農家の減少と地方の衰退を招いたことがあげられるが、一方で、ドミニカの地域社会におけるカネにまつわる伝統的な規範意識が移民の創出に大きくかかわっている。その規範とは、ドラッグを売ったり、泥棒をして稼いだカネは、「きたないカネ」とされ、陰口や嫉妬の対象となる一方で、まじめに働いて稼いだカネは「きれいなカネ」とされるというものである。貧困層の人びとにとって、こうした規範に背かずにカネを稼ぐ方法は、米国へ移住し、ドルを故郷に送金する以外にないのである。つまり、伝統的な規範の存在が、移住の文化を形成することになったのである。さらにいえば、

この移住の文化を内在化して育ったプロ野球選手にも移民としての意識が埋め込まれているのである。

「野球移民」による送金

大リーガーの年俸は膨大な金額にのぼるが、そのうちの少なくない額が彼らの出身地のバリオ（共同体としての村）に分配されている。筆者の調査地出身のA選手の場合、毎年、1億円近い金額をバリオの人びとに分配している。年俸10億円以上を稼ぐAは、父親と11人の兄弟姉妹にはじまり、親類やバリオの住民にまで分配している。

興味深いのは、バリオの住民への分配方法である。直接、現金を手渡すのではなく、カトリックの行事にあわせる形をとる。クリスマスには、バリオの住民に食糧の詰まった袋を配り、守護聖人の祭りの開催資金を提供するといった方法である。自分が大リーガーになれたのは、神の恩し召しであると認識しているため、その見返りとして、「神の子」であるバリオの住民を神に代わって扶養する義務があると考えている。その前提として、バリオの住民全体に野球で稼いだカネは、「きれいなカネ」だという規範意識が共有されていることは言うまでもない。ここからは、大リーガーの分配行動を、一般の移民が故郷の子どもの養育費のために送金していることのアナロジーとして捉えることが可能であり、大リーガーによる分配は、送金として位置づけることができる。

このように「野球移民」とバリオの人びとの関係は、伝統的な地域社会の論理によって規定されており、それが送金という具体的なかたちとなって顕在化したものなのである。いいかえるならば、二国間をまたぐこうしたトランスナショナルな関係性は、明日の生活さえままならない予測不可能で不安定な現代世界を生きぬくために、バリオの人びとが伝統的な規範意識や価値観を武器に生みだした生活戦略のひとつといえるのである。

越境するスポーツ文化

ここまでドミニカにおいて「野球移民」が誕生する背景を米国や出身社会の文化との関係から考察をおこなってきたが、ブラジルにも「野球移民」と呼ぶべき人びとがいることを指摘しておきたい。かつて日本からラテンアメリカへと移住した日本人が移住先で野球を普及させた結果、サッカーが「国技」とされるブラジルから、日系ブラジル人のプロ野球選手が誕生する

までになった。還流した「野球移民」の例として特筆される。

筆者がアメリカのドミニカ移民コミュニティにおいて実施した調査からも、ドミニカ移民が野球を故郷に重ねあわせている実態が観察された。故郷と異なる日常生活でのストレスを発散するためには、故郷の文化とまでなった野球が必要だったのである。このように、世界各地に伝播したスポーツが、受容された地域の文化に取り込まれる過程で独自の意味づけをもつようになっていることは極めて興味深い現象である。

本稿でとりあげた「野球移民」は、ドミニカやカリブ海地域に特有の現象である。しかしながら、野球をサッカーなどの別のスポーツに、カリブ海地域を西アフリカや南米などの別の地域に置き換えてみれば、「スポーツ移民」が世界各地で同時代的に生じている現象であることがわかる。また、この現象が一般の労働移民とよばれる人びとの増加と歩調をあわせるようにして顕在化してきたことからもわかるように、世界的な移民現象のなかのひとつの形態として説明されるべきであろう。つまり、わたしたちが日頃から慣れ親しんでいるプロ・スポーツの世界は、まさに現代世界の縮図ともいえるのである。

(くぼた さとる 奈良県立大学地域創造学部専任講師)

【参考文献】

- Hernandez, Ramona and Francisco, Rivera-Batiz 2004
Dominicans in the United States: A Socioeconomic Profile of the Labor Force. In *Building Strategic Partnerships for Development: Dominican Republic-New York State*. Rodriguez M.E. and Hernandez R. (eds.), pp.26-75. Santo Domingo: Fundacion Global Democracia y Desarrollo.
- Klein, Alan M. 1991
Sugar ball: The American Game, the Dominican Dream. New Haven: Yale University Press.

【統計資料】

- Banco Central de la República Dominicana
<http://www.bancentral.gov.do:8080/english/index-e.asp>
- Baseball Reference.com
<http://www.baseball-reference.com/>
- The World Bank
<http://databank.worldbank.org/data/reports.aspx?source=2&country=DOM&series=&period=t>
- U.S. Census Bureau 2010 *The Hispanic Population: 2010*
<http://www.census.gov/prod/cen2010/briefs/c2010br-04.pdf>

ブラジルサッカー事情

宮川 直也

サッカーのワールドカップ（W杯）全20回の本大会に出場の唯一の国、決勝進出7回、優勝5回、本大会での通算成績104試合71勝17敗16分と、実に輝かしい実績を誇るブラジルの、現在のサッカー事情について述べる。

ブラジルサッカーの歴史と栄光と現状

ブラジルサッカーは、1884年に英國系ブラジル人のチャールス・ウイリアム・ミラーが留学先の英國よりブラジルに持ち帰ってきた2つのサッカーボールが、その始まりと言われている。翌85年4月14日に、ブラジル最初のサッカーの試合がサンパウロで行われた記録が残っている。

今では考えられないが、当時は上流階級のスポーツとされ、サッカーが一般大衆の間に徐々に広がり始めたのは、1920年代に入ってからである。30年代にバルガス政権がスポーツ振興政策を取ったことも後押しとなり、サッカーは33年にプロ化が実現した。

W杯で5回の優勝を誇るブラジルも、50年代までは国際大会で目ぼしい成績は残せなかった。第二次大戦後再開されたW杯はブラジルで開催され地元優勝が期待されたが、199,854人の超満員の観衆のマラカナンスタジアムで行われたウルグアイとの決勝で1-2の逆転負けを喫してしまう。Maracanazoとして知られているいわゆる「マラカナンの悲劇」だが、この敗戦のショックは大きく、この決勝で使用された白色基調のユニフォームはもう二度と使用されることなく、その後の代表チーム（セレソン）の正ユニフォームの色は、カナリア軍団と呼ばれる現在の黄色と緑がベースとなる。

ブラジルがサッカー王国の地位にのし上がっていいくのは58年のスウェーデン大会からであるが、歴代最高のプレーヤーの一人と言われるペレの出現と重なる。70年メキシコ大会の第3回目の優勝まではペレをはじめ、ガリンシャ、ディディ、リベリーノ、トストンなど数多くのスター選手が出現、セレソンを栄光に導いた。ペレの引退後、ブラジルはW杯の優勝から一時期遠のいた。82年のスペイン大会では、ジーコ、ソクラテス、ファルカン、セレーボの黄金のカルテットと

呼ばれたチームを擁してブラジル伝統の芸術的サッカーを展開、優勝間違いなしと言われていたが、準々決勝でカテナチオと呼ばれる守備的サッカーが伝統のイタリアに2-3で敗れてしまう。この敗戦がきっかけとなり、ブラジルサッカーはそれまでの観衆を魅力するような芸術的かつ攻撃的なサッカーから、結果を重視する官僚的なプレースタイルに豹変していったと言われている。ブラジルが再び世界の頂点に立つのは、ロマリオ選手が孤軍奮闘した94年の米国大会そして、ロナウド、リバルド、ロナウジーニョを擁した2002年の日韓大会であるが、特に94年のチームは官僚的サッカーの典型と見られ、優勝したとはいえ国民の評価は今一つ良くない。6度目の優勝を狙った14年の地元開催の大会では、準決勝で組織だった戦術的なサッカーを展開したドイツに1-7と記録的な大敗を喫し、ブラジルサッカーは再度、プレースタイルの変革を迫られることになった。



ペレもプレーしたSantos FCのスタジアム

スター選手不在の現在のブラジルサッカー

つい10年ほど前まではスター選手の宝庫であったブラジルも、今では世界的な名聲を誇る選手は、スペインのバルセロナでプレーするネイマール一人といつても過言ではない。特にストライカー不足は、セレソンの戦績にも影響を与えている。18年のW杯ロシア大会の南米予選では、6月現在2勝1敗3分の勝ち点9と10か国中6位に低迷。上位4位までが本大会出場の権利が与えられ、5位がオセアニア地区予選を勝ち

上がった国とプレーオフ出場、つまりブラジルは現在の6位ではW杯に出場できない。南米のライバル国のアルゼンチンがメッシ（スペイン・バルセロナ）、アグエロ（イングランド・マンチェスター・シティ）、イグアイン（イタリア・ナポリ）、テベス（アルゼンチン・ボカ・ジュニオール）と既に名の通ったストライカー、さらには新星のディ巴拉（イタリア・ユベントス）登場と数多くのスター選手を輩出、ウルグアイがスアレス（スペイン・バルセロナ）、カバーニ（フランス・パリ・サン・ジェルマン）と経験豊かな攻撃陣を擁しているのとは対照的である。ペレを筆頭に過去にはジーコ、カレッカ、ロマリオ、リバルド、ロナウド、ロナウジーニョなど数多くのストライカーを輩出したブラジルにとってスター選手不足は寂しい限りである。以前はストライカーの宝庫であったものの、今では欧州の名門チームで活躍するのは、ゴールキーパーや守備の選手が中心となっている。特にピッチの両サイドに位置し攻撃を仕掛けるいわゆるサイドバック、日本の例で言うとイタリアのインテルで活躍する長友選手のポジションには、伝統的にブラジルは優秀な選手を擁する。日本でもおなじみの、ロベルト・カルロスや、以前鹿島アントラーズで活躍したレオナルド、ジョルジーニョはもともとはサイドバックの選手である。今日ではスペインのバルセロナで活躍するダニエル・アウベス、レアル・マドリードのマルセロが有名で、その他の欧州の名門チームでも多くのブラジル人サイドバックが活躍している。



Escolinha de Futebol

サッカー選手の育成

さて、有名選手になれば巨額の富を手に入れられるサッカー選手はブラジルの庶民、特に貧困層の子供達にとって憧れの的であり目標でもある。しかしながら

ら、そこまで登りつめるにはサッカーがすば抜けて上手いだけではなく、運も必要となる。サッカー選手になる一般的なルートは通常、Escolinha de Futebolと呼ばれるサッカー教室に通う。そこには頻繁にサッカークラブのOlheiroと呼ばれるスカウトが足を運び、各チームが求めるキャラの選手を選びクラブのテストを受けさせる。テストは数日間にわたって行われる場合もあり、また一回のテストに参加する人数は50人程度、合格者は2~3人と非常に狭き登竜門である。受講者はテストマッチ中、何とか目立とうと必死である。めでたく合格すれば、クラブの下部組織（合格者の年齢に即したカテゴリー）に属しプロ選手の卵としてその道が開ける。しかし、そこでも毎年一回の選抜テストで篩にかけられるので、選ばれたとはいえ厳しい道が待ち受けている。不合格した選手はまた元のサッカー教室に戻り、別のクラブのテストのチャンスを狙う。テストは何度でも受けることができる。



Santos FC の私設応援団 一写真はいずれも筆者撮影

ブラジルサッカープロリーグ

ブラジルは日本の国土の22.5倍、26州1連邦直轄区に分かれるため、プロクラブの数も数多くあり、正確な数を把握するのは困難である。クラブの財政状態により廃止されるものもあるから、なおさらである。毎年行われる各州選手権の1部および2部にリーグに出場するクラブ数を調べたところ、2016年はなんと624あった。サッカー王国として知られるブラジルも、地方によってはサッカー後進地方も存在する。クラブ数が多く名門クラブが存在するのは、経済的に発達したブラジル南東部と南部である。北部、中西部は後進地方とみなされている。北東部は全国的に見て強豪クラブは少ないが、地元の名門クラブ同士の対戦となれば、その熱狂的なファンにより観客動員数は多い。先

進地方の南東部、南部でもサッカーが遅れている州がある。例えば、クラブ数の最も多い南東部でも、エスピリト・サント州には全国的に名の知れたクラブは存在せず、後述するブラジル全国選手権の2016年の1～3部リーグには同州のチームはいない。

さて、ブラジルにおける年間の国内大会だが、州選手権、全国選手権（1～4部）とブラジルカップの三つの大会に大別できる。2016年の例で言うと、州選手権は1月の末から5月8日の間、全国選手権が5月14日から12月4日まで続き、その合間にブラジルカップが3月16日から11月30日まで行われる。非常に過密スケジュールで、選手は休む暇もない。オフシーズンは全国選手権の終了から翌年の州選手権の準備が始まる1月上旬までの、1か月間がいいところ。強豪クラブとなれば国内大会以外にも、南米のクラブチャンピオンズリーグコパ・リベルタドーレス、あるいはUEFAヨーロッパリーグに相当するコパ・スダメリカーナに出場することになる。ブラジルの国内大会だけでも強豪クラブとなれば、年間70～80試合消化することになる。隣国のアルゼンチンのクラブチームが年

間45～50試合消化するのに対し、いかにブラジルで試合数が多いかがわかる。

王国復活となるか

地元W杯の準決勝でドイツに1-7と敗れて以来、国民のサッカーに対する関心、期待が薄れたように感じる。ブラジルは再びそのプレースタイルの変革を求められているが、果たして個人技に加え戦術的に優れたサッカーができるか、ロシア大会出場に向け大きな試練が待ち受けている。

（みやかわ なおや ブラジル在住20年、ミナスジェライス州
アルフェナス市在住）

（注）文中の現役選手の所属チームは2015～16シーズン終了時のもの。

ラテンアメリカ参考図書案内



『「野球移民」を生みだす人々 ドミニカ共和国とアメリカにまたがる扶養義務のネットワーク』

窪田 晓 清水弘文堂書房
2016年2月 268頁 4,300円+税 ISBN978-4-87950-621-4

サッカー、ゴルフ、ボクシング、相撲などのプロスポーツ選手の国際移動を移民現象としてとらえ、ドミニカ共和国（以下 ドミニカ）から米国等へ送り出された野球選手たち「野球移民」がどのように誕生し、複雑・流動化する現代にあって送り出した社会との関係の中での生き様を考察した、スポーツを介した国際移住の試論。

ドミニカに野球が伝搬し、米国野球の大リーグ（MLB）による野球アカデミー創設などの選手リクルート・システムが確立していく過程、野球がドミニカの人々の価値観に合わされ実践されて「ペロータ」（スペイン語で球）という独自文化になっていて、それが移民とともに越境し移住先の米国において定着していること、幼い時からペロータに馴染んできたドミニカ出身の大リーガーが、出身共同体（バリオ）への富の還元を通じて扶養義務関係が続いていることなどを、多くの事例フィールドノートを交えて明らかにし、移民を送り出している社会との相互交渉の連続性を位置づけたスポーツ人類学の新しい方法論により、「野球移民」を通してドミニカの人々の生活世界を描いている。

〔桜井 敏浩〕

柔道 日本とブラジル

浅賀 健一

はじめに

小学校4年生の時、従兄について町道場へ行ったのが、柔道との出会いである。中学、高校、大学と稽古を続け、卒業後も新日鐵八幡で柔道部に入った。大学入試の当日も高校の道場で稽古をするほど、柔道にのめり込んでいた。38歳で出場した東日本実業団大会では、神永先生が主審をされ、技あり優勢勝ちをなんとか拾って引退。その後は、大学のコーチや新日鐵本社の柔道部長を務めた。

ブラジル駐在は2回経験しているが、1977年から83年の間は、サンパウロ市内の石井先生の道場や、USIMINAS社のUSIPAクラブでもうきになって汗を流したのが懐かしい。二度目の2000年から07年末までは、リオ市イパネマのMehdi先生の道場や、ブラジルナショナルチームの寝技の指導、サンパウロ大学医学部の“SENSEI”を拝命した。

退職後は、全柔連の少年柔道普及・振興活動や、母校開成学園の柔道部師範として子供達と向き合っている。今回、執筆の機会を戴いたことから、ブラジルを中心としたラテンアメリカの柔道と日本との関係について、若干の感想を述べたい。

柔道の国際化の歴史

柔道は16世紀ごろの鎧組討ちの武芸に源を発すると言われている。その後江戸時代になって諸流派が勃興し、武士のみならず岡っ引きなども逮捕術として学んだことが資料に見られる。明治に入り、嘉納師範が自ら学ばれた天神真楊流柔術や起倒流柔術の理論や技術を基本に、崩しの考え方等を加えて体系化し、講道館柔道を確立された。時に師範は22歳、教育者を目指す若者であった。いささか脱線するが、嘉納師範の誕生は万延元年、西暦1860年であるが、内村鑑三1861年、新渡戸稻造、森鷗外が1862年、翌63年に岡倉天心が生まれている。和魂漢才の教育を基礎に洋才を兼ね備えた偉大な先人が相次いで輩出されたのは、当時の歐米列強によるアジアの蚕食と無関係ではない。

日露戦争は明治38年に終結し、翌年米国の仲介でポーツマス条約が成立。そんな時代背景のなか、嘉納師範は明治36年に先ず高弟の山下義韶を米国に派遣、

翌37年富田常次郎、前田光世を米国に送った。柔道が世界に普及してゆく流れには、大きく二つの系統があるように思われる。一つはモンゴル相撲に代表されるシルクロード地域に昔から分布する格闘技の伝統。北トルコ、ジョージアに残るチダオバ、中東からトルコに至るレスリング系の格闘技。この流れはスイスのチロル地方にまで及んでいる。古来からあった格闘技の文化が柔道の普及に大いに役立ったと言える。帯を締め、畳の上で技を競い合うという、東洋的な様式とも相俟って欧州に広まっていった。

一方、米国に渡った上述の前田氏は単身欧州に渡り、さらに中・南米等をボクサーやレスラー相手に柔道の声価を高め、終の棲家をブラジルのベレン市に構えた。彼はその後半生を、日本からやってくる移民の救済事業に捧げたと言われる。今や日本にも逆上陸しているブラジリアン柔術、その開祖とも言われる故エリオ・グレイシー氏のお宅を訪問した際に、彼の長兄が前田氏から手ほどきを受けている様子を道場の隅で見ていたという話を伺ったことがある。彼がプロレスに身を投じる前の木村正彦とマラカナンサッカー場で、当時の大統領臨席のもと、試合をしたことはブラジルでも有名な話だ。木村氏の関節技 腕がらみを受けたが、参ったをしなかったので、肘関節が碎けたと当時の新聞は報じている。参ったをしなかったエリオに対して、木村氏が敬意を払ってくれたと、喜んでいた彼の表情は今でもよく憶えている。

一つ疑問があるのは、なぜ前田氏は柔道と名乗らず、柔術と称していたのだろうか？自分の勝手な推測では、柔道の伝道師として欧米からラテンアメリカを回って、まさに柔道の声望を高める活動を続けてきたわけだが、嘉納師範が禁じていた賭け試合や他流試合をしながら糊口をしのぎ流浪せざるを得なかった事情があるのでないかと思われる。また、フリーライターの宮澤正行氏の文献によれば、笠戸丸以前に竹沢万次という人が、欧州からの興行一座に加わって、柔道技を見せていた史実があるとのことである。

ブラジルの柔道

ブラジルへの柔道の伝播という意味では、竹沢万次

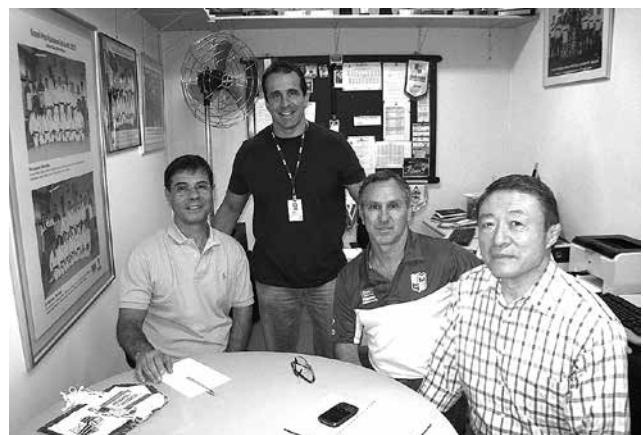
や前田光世の活動があるが、大きな流れという視点では、日本からの移民が自らの子弟やコロニアの青少年の教育のためにもち込んだ伝統がある。柔道は今や、サンパウロやリオ、ペロオリゾンテのような大都市だけではなく地方からも優秀な選手が育つ基盤がある。ブラジルにおいて柔道が脚光を浴びる契機になったのは、何と言ってもミュンヘンオリンピック（1972年）で石井千秋氏が銅メダルを獲得したことであろう。ブラジル人もやればオリンピックでメダルが取れるという事実が大きなインパクトを与えた。このミュンヘンでブラジルが獲得したメダルは、石井千秋の銅メダルと、三段跳びのネルソン・ブルデンシオの銅メダルの2個であった。

石井氏は栃木県足利市の出身で、早稲田大学卒業後、直ちに移民船「あめりか丸」に乗り、世界に雄飛するとの志を抱いてブラジルに渡った。その石井氏と岡野脩平氏（中央大学卒、大谷重工に入社、東京オリンピックの候補選手）との出会いが、ブラジルに柔道初のメダルをもたらした。

現在、日本の全柔連登録人口は20万人を切る状況にあるが、ブラジルでは競技人口が100万人とも150万人以上とも言われるまでに普及している。馬術やヨット、バレー、ビーチバレーと並んで、リオオリンピックではメダルにもっとも近い種目の一つになっている。2012年のロンドンでは、男女それぞれ2名、計4個のメダルを獲得しており、日本の男子4個、女子3個と比べても、日本を脅かす第二グループに入っている。その他、実績があるキューバやコロンビア、アルゼンチンからもメダリストが生まれており、今後一層の競技力向上が期待されている。筆者の友人チアゴ・カミロ選手は、サンパウロ州の内陸バストス市の生まれで、18歳にしてシドニーオリンピック（2000年）で銀メダルに輝き、07年にブラジルで開催された世界選手権では世界チャンピオンに、北京オリンピック（08年）では銅メダルを獲得した。彼は地方出身で大輪の花を咲かせた代表的な選手の一人である。

女子についても、先天的な身体能力の高さと、勝負の本番に強い選手を生み出す風土がある。石井先生の長女のターニアさんを一時期指導したことがあるが、親譲りのDNAもあって、パンアメリカン大会ではチャンピオンになり、ブラジル代表としてバルセロナオリンピックにも出場している。米国代表としてエッセンの世界選手権で優勝（日本の古賀稔彦に勝ってリベンジした）したマーク・スウェイン氏の夫人がそのタ

ーニアさんだ。なにはともあれ、日本人以上に恵まれた肉体をもっているので、練習環境や技術的な研究心が備われば、さらに強力なライバルになることは間違いない。



ミナスティニスクラブにてナショナルチームの合宿
2013年、左端はブラジル柔道連盟副会長ネイ氏、右端は筆者

ウジミナス製鉄と柔道

同社のイパチンガ製鉄所の建設当時、八幡製鉄（現在の新日鐵住金）から派遣された阿南惟正氏と田尻慶一氏が中心となって設営された、おが屑の上にマットを敷いた道場がウジミナス柔道の出発点だ。後年、新日鐵とウジミナスはスポーツ交流を開始。柔道については、初代の須磨周司氏から数えて7人の指導者を派遣し、ミナスジェライス州やブラジル柔道の発展の礎となった。当時の永野会長と武田社長の命を受けて、新日鐵柔道部監督の神永昭夫氏（1964年、東京オリンピックでオランダのヘーシンクとの決勝で敗れた）がブラジルを視察。現地の熱い取り組み姿勢に触れ、ブラジル柔道の将来の発展のためには一流の指導者を出すべしとの大英断が下された。須磨氏は筆者と同期入社で、1969年の世界選手権重量級の金メダリスト。彼がイパチンガに赴任した当時は、ブラジルのナショナルチームの強化合宿がイパチンガの道場で行われたことがあると伺っている。記憶がいさかあやしいが、私が駐在していた時期にも、ホジェリオ選手と女子選手1名が、イパチンガの道場からオリンピック代表になっている。柔道以外にもサッカーや水泳の指導者の交換があり、黒佐年明氏（背泳の世界記録保持者田中聰子を育てた）が基礎を築いたイパチンガ水泳部からも、ブラジルを代表する選手が生まれている。イパチンガのウジッパクラブ道場は、最盛期には1,000人を超える練習生を擁していたが、現在は100人余りの児童を対象に指導が継続されている。



東京オリンピックの覇者ヘーシングク氏と1995年、千葉で開催された世界選手権の会場にて(左端から2人目 阿南惟正(元新日鐵)、4人目 アントン・ヘーシングク、5人目 田尻慶一(元新日鐵)の各氏。右端は筆者)

パラリンピック

ブラジルは柔道の先進国であると同時に、障害者スポーツを支援する社会的風土があり、パラリンピックでも活躍する選手を送り出している。2001年リオで開催された視覚障害者柔道選手権で、筆者は貴重な体験をした。日本視覚障害者柔道連盟が日本からの選手派遣を断念するなか、静岡県出身の稻葉統也(もとなり)氏が個人の資格で大会に参加された。筆者は、リオデジャネイロ州日伯文化体育連盟のサポートのもと代理監督を務めた。試合前の準備運動で、彼の打ち込み稽古の相手をしながら、一回戦で当たるアルゼンチンの選手が、右組の背負い投げの練習している様子を彼に話した。相手選手の特徴や右組みか左組みかの組手の情報等を事前に伝える支援を必要とするが、一旦試合が始まれば、健常者が足元にも及ばない繊細な神経、聴覚、嗅覚、記憶力等を総動員して闘う、限界で勝負している人間の姿に心を打たれた。試合の翌日、稻葉さんは、世界的に有名なポンジアスカル(砂糖パンの山)を観たいと、私のフラメンゴのアパートを訪ねてきた。眺望を堪能した後、壁伝いに約400平方メートルの室内をぐるっと回った。「稻葉さん、ここが入り口ですよ」と言うと、彼が先ほど脱いだ靴をすばっと履いた。視覚障害をもつ選手は、一般の健常者が気付かなくなっていることや、退化させてしまった生まれ持った能力を、限界まで訓練して競技に取り組んでいることを実感した。稻葉氏との出会いで、健常者が当たり前に見えているからこそ見えなくなっているもの、普通に聞こえていることできちんと聴き分けられなくなっていることが沢山あることに気付かされた。空港での別れ際、彼は「目が見えなくなってから、良く見えるようになりました」と名言を残して帰国の途につく

いた。是非、リオのオリンピックではパラリンピックにも注目して欲しいと思い、筆者の経験を紹介させて戴いた。

ブラジルを中心としたラテンアメリカに期待

競技力という観点では、格闘技に適した体力や気質の面で日本人に優るとも劣らない潜在能力があり、良い指導者と練習環境に恵まれた選手は、国際的にもトップクラスの成績を収めている。特にブラジルでは、柔道の教育的な側面も注目され、地域での青少年教育のプログラムに採用されているケースが見られる。

日本は柔道発祥の国だが、国際柔道連盟における立ち位置が低くなっている現実を認めざるを得ない。スポーツ全般が、商業化の色彩を強め、視聴率の取れるイベント運営に傾斜しているが、柔道も例外ではない。

このような背景認識のもと、国際柔道連盟の動向には目を配りながらも、嘉納師範の三育(知育・体育・德育)の精神を守り、本来の柔道の譲れない部分をどう守り抜くのか、競技力のみならず、国際柔道連盟における政治力をも日本の柔道界には求められている。欧州とは異なり、日本の文化や伝統に深い理解をもつブラジルを中心とするラテンアメリカ各国の柔道連盟と連携を強め、正しい柔道の理解者を増やし、本来あるべき柔道の普及・発展を支えるためにも、リオのオリンピックとパラリンピックでの日本とラテンアメリカ諸国の選手の活躍に期待したい。

(あさか けんいち 元新日本製鐵顧問)

アルゼンチンにおけるラグビー事情

藤田 倔郎

ラテンアメリカ、南米といえばフットボールという印象が強すぎて、「アルゼンチンでもラグビーをやっているの？」というのが、日本人の一般的な受け止め方と考える。アルゼンチン国内においても一般的にスポーツといえばフットボールであることは間違いない。しかし、アルゼンチンのラグビーの歴史は古く、1864年にはアルゼンチン最古のラグビークラブ（ブエノスアイレス・クラブ）が英国人のクラブとして発足したと言われている。そして、富裕なアマチュア・プレーヤー、一部の愛好家のエリート・スポーツとして長年親しまれてきたのである。国際ラグビー・フットボール協議会が結成されたのが1886年であることから見ても、歴史の古さがよく分かる。（なお、当初のフットボールのFが消えて国際ラグビー評議会と名称が変わったのは、ようやく2000年のことである。）

アルゼンチンの旧宗主国はスペインであり、公用語もスペイン語であるが、鉱物資源が豊富で自然環境に恵まれていたことから、旧宗主国スペインのみならず欧州各国から様々な人間が流入した。そして、なかでも英国人は港湾、鉄道、産業等の面で多くの遺産を残しており、また、文化的にもゴルフ場の建設、競走馬、ラグビーなどに影響を与えたと言われている。上記したように、富裕なアマチュア・プレーヤーが中心となって行われてきたラグビーの試合には、フットボールと違い若い女性がたくさん来ると、よく言われている。

それでは、ラグビーそのものは世界的な位置づけの観点からどうであったのかを見ていきたい。

アルゼンチンでは、フットボールのようにプロ・リーグではなく、あくまでもアマチュア・スポーツとして行われてきている。従い、国の代表の「ロス・プーマス」に選ばれても、仕事の都合や家族との関係で代表を辞退するケースも出ている。現在、アルゼンチン・ラグビー協会は25の州チームで構成されており、学生・大学生、クラブチームなど色々なクラスに分かれているが、およそ10万人のプレーヤーがいると言われている。学生・大学生のラグビーは紆余曲折を経て2001年に学生ラグビー委員会として再構成され、学生ラグビー全体を包含する組織として存在している。以前は、大学でラグビーをしながら、地域のクラブチームに於いてもプレーすることが認められていたが、05年には禁止された。このような状況の中で、アルゼンチン国内での最も重要な戦いは「国立クラブ競技会」であり、最近の勝者は“Hindu”であった。

アルゼンチンは国際ラグビー評議会のメンバーであるが、創設メンバー（イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、フランスの8か国）ではなく、カナダ、イタリア、日本とともに、ラグビー新興国として位置づけられ、評議会理事会に1名の代表を出している。この評議会の創設メンバーとアルゼンチン、イタリアの10か国が世界のラグビーにおいて「レベル1」と評されており、これらの国だけで世界のラグビー・プレーヤーの80%近くを占めると言われている。また、アルゼンチン・ラグビー協会は南米大陸ラグビー同盟（ウルグアイ、ブラジル、チリ等が参加）の創設者であり、

アルゼンチン代表（Los Pumas）のラグビー・ワールドカップに於ける成績一覧

| 回数 | 年 | 成績 | 優勝国 | 出場チーム数 | 備考（その他の南米国） |
|-----|-------|---------------|----------|--------|------------------|
| 第1回 | 1987年 | 1次リーグ敗退（1勝2敗） | ニュージーランド | 16 | アルゼンチンのみ |
| 第2回 | 1991年 | 1次リーグ敗退（3敗） | オーストラリア | 16 | アルゼンチンのみ |
| 第3回 | 1995年 | 1次リーグ敗退（3敗） | 南アフリカ | 16 | アルゼンチンのみ |
| 第4回 | 1999年 | 準々決勝で敗退 | オーストラリア | 20 | ウルグアイ出場（1次リーグ敗退） |
| 第5回 | 2003年 | 1次リーグ敗退（2勝2敗） | イングランド | 20 | ウルグアイ出場（1次リーグ敗退） |
| 第6回 | 2007年 | 3位 | 南アフリカ | 20 | アルゼンチンのみ |
| 第7回 | 2011年 | 準々決勝で敗退 | ニュージーランド | 20 | アルゼンチンのみ |
| 第8回 | 2015年 | 4位 | ニュージーランド | 20 | ウルグアイ出場（1次リーグ敗退） |

1951年以来、参加しなかった81年を除いて、南米のラグビー・チャンピオンであり続けている。

国際ラグビー評議会は、1987年に第1回ラグビー・ワールドカップを開催し、95年にはアマチュアリズムから脱却し、積年の課題であったプロラグビーの道を認めるようになり、世界のラグビーは大きな変貌を遂げていく。ここで、アルゼンチン・ラグビーのワールドカップでの成績を見ていきたい。(表 参照)

これまで8回の大会があったが、まだ、優勝の美酒は味わえないものの、最近の躍進は目を見張るものがある。2007年の第6回大会では、アルゼンチンは優勝した南アフリカに準決勝で13-37で負けたものの、大会を通じて負けたのはこの試合だけであり、3位になった。特にこの大会はフランスで行われ、完全アウェーの状況の中で地元チームに1次リーグ、3位決定戦の2回とも勝ち、それまでフットボールに特化していたアルゼンチン大衆の目をぐんと引き付けた。また昨15年の第8回大会でも4位に入ったのは記憶に新しいところである。

近年の国際試合でのこの好成績は、アルゼンチン・ラグビーの国内における大躍進をもたらし、ようやくラグビーに1800年末の開始当初以来の「エリート・スポーツ」から大衆化をもたらしたと言える。しかし、この方向性が確固たるものとして定着しうるかどうかは、今後のワールドカップ、また、今年から正式に参戦し始めた「スーパー・ラグビー」(注)においてアルゼンチンのチーム(ジャガーズ)がより良い結果を出



ジャガーズのプレーヤー(ジャガーズのHPより)

せるかどうかにかかっていると言える。

また、アルゼンチンの代表チームは「ロス・プーマス」(英語でピューマ)の愛称で親しまれてきており、これまで、このメンバーに選ばれてもシーズンオフにはヨーロッパのプロ・クラブに所属してプレーすることが認められてきたが、国の代表に選ばれるためには、プ

レーヤーは必ずアルゼンチンラグビー協会と契約しなければならず、2016年から参戦した「スーパー・ラグビー」との関係もあり、過渡的な措置としてこのことが認められなくなると考えられる。

ラグビーそのものとは直接の関係はないが、アルゼンチンのラグビー・ジャージの左胸に刺繡されたエンブレムの逸話を紹介しておく。(日本チームは桜の花である)

アルゼンチン代表のジャージは水色と白の横縞で、その左胸に斑点のある黄金色のネコ科の猛獸が描かれている。これは、実はピューマではなく、パラナ川とウルグアイ川に挟まれたラプラタ河口のジャングルに生息する、日本名パラナ・ジャガーという動物なのである。正式にはジャガレットと呼ばれるジャガーの亜種である。ピューマの体には斑点はなく、また、ピューマは北米大陸のみに生息しており、南米には生息していないのである。

それでは、アルゼンチン代表がどうして「ロス・プーマス」と呼ばれるようになったのだろうか。1965年にアルゼンチン代表チームが南アフリカへ遠征したときに、ヨハネスブルグの空港で、この時居合わせた記者が、好奇心から、選手にエンブレムの動物は何かと尋ね、その選手は「ジャガレット」と答えたが、記者は、そんな聞いたこともない動物の名前は分からぬ、これは「ピューマ」だと勝手に決めつけて、その翌日から、「ピューマ」の名前が新聞紙面ににぎわしたということらしい。

この話は、アルゼンチン代表として遠征に参加し、後に、ラグビーの記者になったN.ソラール氏が、自ら目撃したことを語った話だけに、信ぴょう性が高い。

2019年に日本で開催される第9回ラグビー・ワールドカップにおいて、アルゼンチン代表、日本代表の両国が登場し、8強に勝ち残り、壮絶な戦いをしてくれることを祈念して筆をおきたい。

(ふじた ごろう 一般社団法人日本アルゼンチン協会業務執行理事)

(注) スーパー・ラグビー: 1996年からニュージーランド、オーストラリア、南アフリカの3か国に本拠地を置くチームで争われてきたラグビーの国際的なプロリーグで、今季よりジャガーズ(アルゼンチン)、サンウルブズ(日本)も加わり、計18チームが4つの地区に分かれて、それぞれ15試合を戦う。各地区上位2チームが準々決勝に進む。

2015 年のワールドカップで 4 強を独占した南半球勢の各国代表クラスの選手が揃い「世界最高峰リーグ」と称される。因みに、16 年 4 月 23 日（土）に秩父宮ラグビー場で行われたジャガーズ戦でサンウルブズが 36 – 28 で記念すべき初勝利をあげた。

【参考文献】

- 『世界のラグビー基礎知識』 小林 深緑郎 ベースボールマガジン社
『ラグビー 進化する世界のプレースタイル』 グニエル・プティエ（井川 浩訳）白水社クセジュ文庫
『ザ・ワールドラグビー』 大友 信彦 新潮社

なお、在日アルゼンチン大使館の Sr. Da Ponte 書記官には、アルゼンチンにおける最近のラグビー事情を色々とご教示戴いた。

上記の皆様方には、心より御礼申し上げます。

ラテンアメリカ参考図書案内



『コロンビアの素顔』

寺澤辰磨 かまくら春秋社
2016 年 4 月 195 頁 1,800 円+税 ISBN978-4-7740-0679-6

コロンビアについて、人口動態、地勢、近代史、日系人を概観した「概要」から始まり、コロンビアの現代政治における特質である「二大政党制と 1991 年憲法」、格差社会の定着とそれが大きな要因でもあり、長く暴力の横行を引き起こした反政府武装ゲリラ、麻薬密売組織の存在を「社会構造」で、「第二次世界大戦後のラテンアメリカ諸国の経済政策」では輸入代替工業化政策の採りあげと成果、新自由主義導入後の動向を主要国との比較で、さらに現代政治の中で試みられた「ガビリア政権の経済改革」と「ウリベ政権の経済改革」の分析の後、最終章「コロンビアの経済運営の特殊性」について解説している。

著者は大蔵省出身で 1975 年から外務省に出向して在アルゼンチン大使館に在勤、国税庁長官から退官後 2007 ~ 10 年の間駐コロンビア大使を務めた。コロンビアはウリベ政権以降、ゲリラや麻薬組織を追い詰め、劇的に治安を回復させているが、それらの背景となったそもそも歴史、社会・経済、政治構造、近年の経済改革や経済運営の特殊性を本書で知り、さらに著者帰国後 11 年にアジア経済研究所から上梓した『ビオレンシアの政治社会史—若き国コロンビアの悪魔払い』<http://latin-america.jp/archives/5881> と合わせ読めば、以前のイメージとは大きく変容した現在のコロンビアを理解する上で極めて有益な解説書である。

（桜井 敏浩）

想いは海を渡り、南米の大自然を駆け抜ける 一日野自動車のダカールラリーへの挑戦

日野自動車株式会社 ダカールラリー事務局

ダカールラリーとは

ダカールラリーは、冒険心にあふれたフランス人の青年ティエリー・サビーヌによって、1978年に始められた。当初はパリをスタートしてセネガルの首都ダカールにゴールすることから、パリ・ダカールラリー（通称パリダカ）と呼ばれていたが、2008年にアフリカの政情不安により中止を余儀なくされ、翌2009年から南米大陸に舞台を移し、現在はダカールラリーと称している。

競技者は、2週間をかけて約1万キロにわたる砂漠や砂丘、土漠、荒野などの道なき道を走り続け、総合タイムを競う。完走率が5割に満たない年も珍しくないことから「世界一過酷なラリー」と言われており、それが一層競技者のチャレンジスピリットを掻き立てる。2輪、クワッド（4輪バギー）、4輪、トラックの4部門に、約50ヶ国から400台を超える競技車両が参戦する、世界的に注目を集める一大イベントである。

南米では、標高が4,000mを超えるアンデスの山々や、世界で最も降水量が少ないアタカマ砂漠などの大自然が行く手を阻み、さらに過酷さを増している。最終日のゴールセレモニーはブエノスアイレスなどの都市内で行われ、特設の表彰台にラリーを完走した全部門の全車両が登壇し、会場を埋め尽くす数十万人の観客が



ダカールラリー 2017はパラグアイ～ボリビア～アルゼンチンで開催

チームを祝福する。持てるすべての力を振り絞って戦い抜いた競技者達が、サポーターとともに喜びを爆発させ、熱狂は最高潮に達する。

日野自動車の挑戦

日野自動車は、1991年に創立50周年の記念イベン



南米の大自然を駆け抜ける「日野レンジャー」（写真提供：日野自動車（株））

トとして、日本の商用車メーカーとして初めてダカールラリーに参戦。以来、毎回参戦を続け、2016年までに連続25回の完走を果たしている。四半世紀もの間には、リーマンショックをはじめ企業として苦しい時期もあったが、ダカールラリーへの参戦は「挑戦を続ける日野スピリットの象徴」として、一度もやめることはなかった。

初参戦から3年後の1994年にはトラック部門で総合2位となり、翌95年も2位の座を手にした。97年には、トラック部門では史上初となる1・2・3位を独占するという快挙を成し遂げ、世界中を驚かせた。その後は総合優勝からは遠ざかっているが、トラック部門の排気量10リットル未満クラスでは、2010年から16年にかけて7連覇の栄冠を手にしている。

競技用の車両は、市販車の「日野レンジャー（英語名：HINO500 Series）」をベースに、日野自動車のエンジニアが改造を施したダカールラリー専用のトラック。整備を担当するメカニックは日本全国の販売会社から選抜し、南米での活動拠点は現地の販売代理店が設営するなど、日野グループが一丸となって参戦している。ドライバーは、初参戦以来のパートナーであり70歳を超えてなお現役を続け、競技者達から「ダカールラリーのレジェンド」と称えられている菅原義正氏と、同氏の次男である菅原照仁氏。この二人の親子ドライバーと日野自動車は、ともに「世界一過酷なラリー」に挑む同志として、長年固い絆で結ばれている。

「日本」にこだわる

ダカールラリーには世界中から競技者が参戦しており、多国籍メンバーによるチームも多いが、日野自動車は「日本のチーム」であることにこだわっている。日本製のトラック、日本人のメンバーだけでなく、車両の装飾や競技中の食事まで、まさに「日本」づくり。それは、世界中が注目するラリーに日本の代表という誇りを持って参戦し、また、遠く地球の裏側の南米の地で日本の素晴らしい



夜を徹して整備を行う日野自動車のメカニック達（写真提供：日野自動車（株））

伝えたいという想いからである。

競技車両の「日野レンジャー」は、排気量9リットルのエンジンを搭載した中型トラックであり、パワーの点では排気量が優に10リットルを超えるライバル達の大型トラックよりも劣るが、軽量で機敏性に優れるという利点もある。日野のエンジニア達は、ドライバーが車両を意のままに操ってポテンシャルを最大限に発揮できるように、何度も走行テストを繰り返しながらドライバーの要求に耳を傾け、細部に至るまで徹底的に改造やチューニングを施す。日本ならではのきめ細やかな「ものづくり」の技術、知恵と工夫、たゆまない改善の努力によって、大自然の道なき道を駿馬のごとくしなやかに駆け抜け、排気量が10リットルを超えるモンスタートラック達と互角に戦う車両をつくる



歓喜の渦に包まれるゴールセレモニー（写真提供：日野自動車（株））

ことができるのである。

また、毎夜車両がキャンプ地に到着すると、メカニック達は寝る間も惜しんで入念に整備を行う。翌朝のスタートまでの、限られた時間で膨大な量の作業を行うため、日野のメカニック達のチームワークと集中力の高さは並大抵ではなく、車両がどのような状態であろうと、文字通り一夜にして完璧な状態に仕上げる。これは、自分がいかにチームに貢献できるかという「個」ではなく「和」を貴ぶ日本の精神性や、互いを尊重し相手を思いやる心遣いのなせる技と言える。彼らの仕事ぶりはライバルのメカニック達からも一目置かれており、深夜にその作業の様子をわざわざ見に来るほどである。

競技車両には歌舞伎の隈取をイメージしたカラーを施し、千両役者のようにライバル達のトラックに睨みを効かせ、また、屋根には「こいのぼり」を飾り、過酷な山脈や砂漠を川の流れに見立てた鯉が、ゴールを目指して元気に泳いで行く。その姿は、「日野レンジャー」が日本のトラックであることを、一層際立たせる。キャンプ地では、日野のスタッフが日本から持参したお米や炊飯器で炊込みご飯などの日本食を作り、その味はライバル達の間でも評判である。近年ますますグローバル化が進む一方で、国ごとに育まれた伝統や文化が失われつつあるが、私達はラリーを通じて日本の文化の素晴らしさを伝え、世界中の人々に親しみを感じてもらいたいと願っている。

総合10位入りを目指す

ダカールラリーが競技である以上、やはり順位が最も大事である。現在は、排気量10リットル未満クラスでは7連覇を達成しつつも、トラック部門の総合順位では優勝から遠ざかって久しく、ここ数年は10位以下に甘んじている。しかし、2017年1月に開催される次のラリーでは、何としても総合10位以内に入り改めて日野チームの強さを世界に証明したい。

日本には「柔よく剛を制す」ということわざがある。これは、剣道や柔道、相撲などで「しなやかなものは、固くて強いものの矛先を巧みにかわして勝利を得る」、転じて「柔弱なものが、かえって剛強なものに勝つ」という意味である。日本ならでは「ものづくり」の技術や、「和」を貴ぶ精神性によって、パワーで勝るモンスタートラックにも、日野チームの総合力で必ずや勝つことができると確信している。

私達は、さらに技術力を磨き、チームの結束力を高めて、これからもダカールラリーへの挑戦を続けていきたい。その想いは日本から海を渡り、南米のアンデス山脈やアタカマ砂漠の大自然を越え、「世界一過酷な」道なき道をも駆け抜けて行くのである。

(ひのじどうしゃ 日野自動車株式会社 ダカールラリー事務局
総合企画部広報・IR室)



冬季五輪を目指して何度も立ち上がる！ 「下町ボブスレー」の挑戦とジャマイカ

奥山 瞳

プロジェクトメンバーの晴れやかな顔に秘められた苦難の歴史

大音量のレゲエミュージックが流れ、華やかな色彩の衣装でリズミカルなダンスに興じるジャマイカの人たち。周辺にはレゲエのCD、Tシャツやアクセサリーなどの雑貨、ジャークチキンやオックスステールなどのフードの屋台が並ぶ。

2016年6月28・29日の両日、「One Love Jamaica Festival(ワンラブジャマイカフェスティバル)」が東京・お台場で開催された。

同フェスティバルは、2004年にジャマイカと日本の国交樹立40周年を記念してスタートした、両国親睦を図るためのイベントである。

ジャマイカ大使館のブースの隣に、ひときわ目を引く黒いマシン、「下町ボブスレー」が展示されていた(写真1)。希望者は搭乗もできる。来場者はかわるがわる応援旗にメッセージを書きこんでいた。「平昌五輪を目指して頑張って！」「滑走入魂」など。



写真1：「One Love Jamaica Festival」で展示された下町ボブスレー
出所：2016年6月28日、筆者撮影

「下町ボブスレーネットワークプロジェクト」のメンバーたちは、搭乗体験をする人たちに座り方や操縦の仕方、マシンの部位についてなどの説明を熱心に行っていた。その顔は実に晴れやかだ。しかしこれ数ヶ月前は、こんな日がやってくるとは、メンバーたちも夢にも思っていなかったに違いない。

「できる」と信じてスタート！

「下町ボブスレーネットワークプロジェクト」は大田区の中小製造業約100社とその主旨に賛同したF1マシンの製造を手がける滋賀県の株式会社東レ・カーボンマジック、空力解析ソフトによる解析を行う大阪府が本社で、大崎に支社を置く株式会社ソフトウエアクリエイドル、トライボロジーの研究を行う東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻 加藤孝久研究室等が共同で、国産による2人乗りのボブスレーソリを開発し、冬季五輪出場を目指すプロジェクトである。

同プロジェクトの発祥は2011年9月5日に遡る。公益財団法人大田区産業振興協会(以下大田区産業振興協会)の小杉聰史というひとりの職員が、A4サイズ2枚のボブスレーのソリの寸法図をもって町工場を訪問したところから始まった。

この時点では、発案者の小杉もプロジェクトへの参加要請を請けた前実行委員長の細貝淳一(株式会社マテリアル代表取締役。任期は2012年1月31日～14年5月31日。現ゼネラルマネージャー)もボブスレーのソリを見たことも触ったこともなかった。

それでも小杉も細貝も「できる」と信じて同プロジェクトはスタートした。細貝は1992年に26歳で株式会社マテリアルというモノづくりのベンチャー企業を創業した。細貝は最初に「やるべきことに不可能はない」と仮説を立ててスタートする。この細貝のリーダーシップが、同プロジェクトを現在に至るまで強力に牽引してきたのである。

工賃無償による製造と試合結果によって共感が広がる

同プロジェクトの大きな特徴としては、大田区の工場激減の現状に危機感を抱いた30～40代の2代目、3代目の経営者が中核メンバーとなっていることである。

そして、フレーム部品製造約250点は、町工場がすべて無償で製作している、という事実には驚きを隠さずにはいられない。

価格の価値にしばられない優れた製品が大田区ではできる——。その確信が同プロジェクトの中小製造業各社を動かした。最初に製造した女子1号機のときの納期は10日、加工費は無償という条件だった。

2012年11月に1号機が完成し、同年12月、長野

市ボブスレー・リュージュパークにて開催された全日本選手権女子2人乗り（吉村・浅津チーム）にて、実戦デビューを飾り、いきなり優勝した（写真2）。

実際に、製造されたソリが結果をともなってきたことによって、繰り返し国内外のメディアに「下町ボブスレー」が報道され認知度と共感が広がったのである。



写真2: 2012年12月23日長野で開催された全日本選手権で初滑走し、女子2人乗りで優勝を飾る 出所: 下町ボブスレーネットワークプロジェクト

日本ボブスレー連盟から下された二度の五輪不採用宣言

その後、着々と新型マシンの製造を進め、2013年10月8日には、一般社団法人日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟（以下日本ボブスレー連盟）と大田区産業振興協会、下町ボブスレーネットワークプロジェクト推進委員会の3団体が五輪に向けての包括的協定を締結した。ところがその翌月11月26日に日本ボブスレー連盟から五輪不採用を言い渡されたのである。これによって残念ながら、2014年2月、ロシアで開催されたソチ五輪には、出場することができなかった。

しかし、ここからが同プロジェクトの底力の見せ所だった。1月後の2013年12月22日の全日本選手権に、下町ボブスレー1・2・3号機で参戦し、2号機の男子2人乗りで脇田・中村チームが準優勝となった。

その後も2018年、韓国で開催される平昌五輪に向けて、国内外の大会に参戦し改修・製造を続けている。

2014年12月23日の全日本選手権では、下町ボブスレー1～4号機が出場し、2号機の女子2人乗りで準優勝（浅津・熊谷チーム）した。

次の五輪には出場できるのではないか――。

大田区中の誰もが祈っていた。ところが2015年11月17日に、日本ボブスレー連盟より2度目の五輪不採用の通知が届いたのである。

翌月12月20日の全日本選手権では、下町ボブスレー1・5号機で参戦し、5号機の男子2人乗りで4位（三上・瀬間チーム）という結果だった。

これによって、一時は平昌五輪への夢も潰えたかのように思えた。しかし、すべては同プロジェクトが、次のステージへ進むためのプロローグだったのである。

ジャマイカ五輪チームとタッグを組む

2016年1月17日・18日。ジャマイカボブスレー連盟と下町ボブスレーネットワークプロジェクトの共同記者会見が長野・東京で開催された（写真3）。「ジャマイカチーム、下町ボブスレーを平昌五輪に採用へ」という発表だった。誰もがそれを聴いて度肝を抜かれた。日本ボブスレー連盟より二度目の五輪不採用を宣告された、わずか2ヶ月のことだったのである。

しかし同プロジェクトは、2015年4月より、海外での五輪採用を目指して、着々と準備を進めていた。

2015年4月29日には、プロジェクトチームがジャマイカ大使館を訪問し、下町ボブスレーについて五輪を目指しているソリであること、チャンスがあったら試走して欲しい旨を交渉した。同年12月16日にはソリの無償提供を申し出た。ソリのカスタマイズ、試走の機会の提供をジャマイカチームに打診したのである。17日、ジャマイカボブスレー連盟ネルソン・クリスチヤン・ストークス会長から「テスト結果が良ければ採用する」との返信があった。

年が明けて2016年1月15日～17日、長野でジャマイカ選手が搭乗して滑走テストを行い、良好な結果を叩き出した。その結果を受けての記者会見だった。この日、プロジェクトメンバーは万感の思いで、ジャマイカナショナルチームと肩を並べて会見に臨んだ。

ストークス会長は、デザイン性に優れていること、操作性が高いことなどから、上位を狙うチャンスが十分あるソリだと評価し、好感度だった。

プロジェクトが発足して約4年が経過した。決して順風満帆な道のりとは言えなかった。そしてタッグを組む国は、なんとジャマイカという妙味。

『クールランニング』という映画がある。1988年、カナダのカルガリー冬季五輪に雪を見たことのない常夏の国・ジャマイカの選手たちが、ボブスレーに挑戦し奮闘した実話を基にしたコメディー映画である。ちなみにタイトルの“Cool Runnings”は「良い旅を」という祈りの言葉だという。



写真3：2016年1月18日ジャマイカボブスレー連盟と下町ボブスレーネットワークプロジェクトの共同記者会（大田区）出所：株式会社ウイル

何が不可能で何が可能であるかは、やってみなければわからない。「できる」と信じて挑戦し続けること。そこにジャマイカチームと下町ボブスレーネットワークプロジェクトの思いが重なる。

下町ボブスレーの冬季五輪への挑戦は、端緒についたばかりである。しかし旅路は険しければ険しいほど得るものは大きいに違いない。

良い旅を！

（おくやま むつみ 株式会社ウイル代表取締役、
静岡大学大学院総合科学技術研究科客員教授）

【参考資料】

大田区『大田区ものづくり産業等実態調査』大田区 2016年

奥山睦『下町ボブスレー』日刊工業新聞社 2013年

奥山睦『地域イノベーション』「『下町ボブスレーネットワークプロジェクト』に見るソーシャル・キャピタル」VOL.7 67~81

貢法政大学地域研究センター2015年

下町ボブスレーネットワークプロジェクト公式サイト

<http://bobsleigh.jp/> 2016年5月30日確認

One Love Jamaica Festival 公式サイト

<http://onelovejamaicafestival.jp/> 2016年6月12日確認

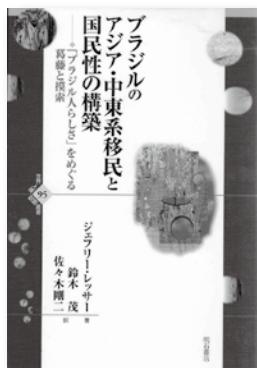
編集部注：2016年7月14日 共同通信配信は、以下のように報じている。

ジャマイカにそり3台提供 下町ボブスレー、10月から順次

東京都大田区の町工場が中心となって国産のそりを開発する「下町ボブスレー」のプロジェクト推進委員会は14日、大田区内で記者会見し、2018年平昌冬季五輪に向けて、ジャマイカ・ボブスレー連盟と2人乗りのそり3台の無償提供で正式契約に調印、2種類を製作して10月から順次納入すると発表した。推進委によると10月に完成予定の「下町スペシャル」は、これまでに開発したモデルの中で最も空気抵抗が小さい。もう1種類はジャマイカ側の技術者の設計を採用して小型化を徹底した「ジャマイカスペシャル」で、12月から2台納入する。

（<http://this.kiji.is/126250353670766596>）

ラテンアメリカ参考図書案内



『ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の構築 －「ブラジル人らしさ」をめぐる葛藤と模索』

ジェフリー・レッサー 鈴木 茂・佐々木剛二訳 明石書店
2016年3月 394頁 4,800円+税 ISBN978-4-7503-4296-2

ブラジルの支配層のアジア系・中東系移民の受け入れ是非をめぐる言説と、ブラジル社会の中で独自のエスニックな空間を築いている主にレバノン・シリア人と日本人移民のアイデンティティ構築をめぐる闘いを、米国のブラジル史学者が考察したもの。

多様な人種・民族の移民から成るブラジル社会は人種隔離がないと言われるが、それは欧州文化とカトリック信仰への同化が暗黙のうちにあるからで、民族の異質性を維持しようとすると不同化とされ排除される。ブラジルの多人種性は欧州白人・先住民インディオ・アフリカからの黒人の三人種融合と言われるが、その人種混淆は植民地時代初期までは白人と先住民、独立以降は白人と黒人の混淆が前提の国民統合であった。その中でマイノリティである後発の中東アラブ系・ユダヤ系・日系のエスニティが存在し独自の空間を確保しようと闘ってきたことに着目し、その闘いと「ブラジル国民」の概念にもたらした変化を明らかにしようとしている。ブラジルを欧州的に改造しようと考案された数々の移民政策が、実際には極めつきの多文化社会を創造したという指摘は興味深い。

（桜井 敏浩）



『マプチエの女』

カリル・フェレ 加藤かおり・川口明百美訳 早川書房（文庫）
2016年2月 654頁 1,200円+税 ISBN978-4-15-181601-7

アルゼンチンの土地には、スペイン征服者が到来した時にはマプチエ、アラウカノその他多くの先住民族が住んでいたが、彼らの多くは殺され土地を奪われた。さらに1877～83年のロカ將軍指揮で始まった「砂漠の征服作戦」では組織的な先住民虐殺によって20万人いたパンパ・パタゴニアの先住民は2万人まで激減した。マプチエ族の娘ジャナは、今は郷里を飛び出しブエノスアイレスにきて大学で美術を専攻し彫刻を造っているが、生活費は売春で稼いでいる。姉妹のように親しい仲間の男娼パウラからやはり仲間の男娼ルスが失踪し、ボカの岸壁から惨殺屍体が収容されるのを目撃したと聞く。警察が捜査しようとしたため、ジャナはかつて軍事政権時代に父と妹を殺され、闇に葬られた「行方不明者」の探索をしている私立探偵のルベンに殺人究明の協力を求めるところから始まる。

このルスの殺害が、過去の独裁政治下（アルゼンチン、チリ、ウルグアイの軍事政権は反対者、左翼活動家弾圧で協力しあった）で猛威を振るい、その後も民政移管後の恩赦法で罰を免れてきた軍警とその手下の秘密組織の手にかかったことが次第に判ってくる。行方不明者の母親や妻たちによる真相究明を求めて毎週でデモを行い、独自の調査を行っている「五月広場母・祖母たちの会」の有力メンバーには、ルベンの母も加わっている。その多くは若者であった失踪者たちは拷問され、遺体は人知れない場所に埋められるか飛行機からラプラタ河口に落とされたが、親と一緒に拉致されたり拘留中に出産した乳幼児は、極秘裏に政権支持者の希望者に里子に出された。

事件は軍政終焉時に証拠隠滅で処分された筈の行方不明者の収容記録の詳細なリスト—そこには尋問担当官などの氏名も載っている—のコピーの一部が秘密組織員だった元記者から次期大統領候補の有力支援者の大物実業家の娘で、親に反旗を翻してジャーナリストになり、自分の親も略取者だったとの疑惑を抱いているマリアの手に渡ったことから彼女自身も誘拐・殺害され、接触あった者たちも次々に殺され、また捜査に動いたジャナとルベン、その協力者たちにも魔の手が迫り、ブエノスアイレス市内と郊外の水郷別荘地帯のティグレ、チリとの国境地帯のチュブ州の山間修道院と場所を変えつつ、軍政時代の將軍以下の組織の残党と彼らの捨て身の闘いが…と、息を呑む展開が繰り広げられるハードボイルド小説。

（桜井 敏浩）

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第20回 ドミニカ共和国

エクトル・パウリノ・ドミンゲス・ロドリゲス
駐日ドミニカ共和国大使

ラテンアメリカで 最も成長率の高い国 — 国民の現政権支持率は史上最高 —



ドミニカ共和国（カリブ海には他に「ドミニカ国」があるが、本項では以下“ドミニカ”と表記する）のエクトル・ドミンゲス大使は、このほどラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、5月に行われた大統領選挙、国會議員選挙及び地方議員選挙の結果、最近の同国の経済状況、同国の政策課題、日本との関係、対中関係、米国・キューバ外交関係再開の同国への影響等について見解を表明した。

— 大使は日本に着任されて約3年にならますが、日本についてどのような印象をお持ちですか。これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は？

大使 この美しくも居心地の良い国日本では驚かされることが沢山あります。自然を尊び大事にすること、仕事に対する献身的な姿勢、科学技術探究への熱意、過去の偉大な偉業と現在の素晴らしい業績等々です。しかし私にとって最も印象的なのは、すべての日本人がこの国の神聖なものを大切に守ろうとする姿勢です。両陛下の臨席される行事はこの上ない厳かさと感謝の念に溢れています。それはこの偉大な国の伝統と文化的、政治的価値を表していると思います。

— 去る5月15日にドミニカで行われた大統領選挙、国會議員選挙及び地方議員選挙の結果はいかがでしたか。

ドミンゲス大使はドミニカ・カトリック大学、ハバナ大学およびマドリード大学で貿易・外交を専攻。電気通信院地方自治体担当、財務省所得税局徴税官、地方自治体連盟副総裁等を歴任後、2013年9月より現職。

— インタビューの一問一答は次のとおり。

大使 ダニロ・メディナ・サンチェス現大統領が62%の得票で再選されました。民主的大統領としては歴史上もっとも高い率です。与党ドミニカ解放党(PLD)はドミニカ革命党(PRD)他13党と連合を組み、国会でも多数を制しました。上院(32議席)で29議席、下院(190議席)で125議席を確保しました。また地方選挙では単独で155の市町村で勝利し、与党連合としては市長及び市議会議員等の60%以上を押さえました。これはドミニカの政治史上初めてで、いわんや再選候補としてはかつてない快挙です。ドミニカ国民はメディナ大統領の実績を認めたということです。最近の世論調査結果は同大統領の支持率がラテンアメリカで最も高いことを示しています。

— ドミニカはバナマと並びラテンアメリカで最も高い経済成長率を遂げている国ですが、成長の原動力は何でしょうか。経済の現状と今後の見通しはいか

がですか。

大使 ドミニカは近年堅実な経済成長を続けており、国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会(CEPAL)によれば、2014年の成長率は7.3%、15年はラテンアメリカ・カリブ地域の成長率がマイナス0.4%の中でドミニカはプラス6.6%と地域で最高の成長率を達成しました。今年の内需および対外要因も好調で力強い成長が期待されています。15年の世銀統計ではドミニカが7%、パナマが6%でした。

経済成長の原動力は観光、鉱業、海外のドミニカ人からの送金、農業、フリーゾーン、主要貿易パートナーである米国経済の回復および石油価格の低下等によります。ドミニカ経済の将来性も明るいでしょう。政府はこれまでの実績を定着させるべく、開発政策をさらに深化させる強い決意を示しています。

— 最も重要な政策課題は貧困削減と教育の質の向上かと思われますが、現状と課題につきどう見ておられますか。

大使 ドミニカは開発途上国としてやるべきことは未だ山ほどあります。メディナ大統領はGDPの4%を教育に投資し、全国津々浦々に学校を建設してきました。教員の能力向上のために投資し、給与も改善しました。次期4年間に各生徒に1台のパソコンを支給し、デジタル・ネットワークを拡大とともに、全国でWi-Fiを使えるようにする予定です。教育分野では真の革命が進んでいます。保健分野も同様です。すべての公立病院で変革が行われています。過去4年間に現政府の積極的な社会政策の結果、100万人近くのドミニカ人が貧困を脱しました。

— ドミニカには、米国との近接性、カリブ海の中心地、及び米国との自由貿易協定が発効されているという利点がありますが、将来的にどのような日本との貿易関係を期待されますか。

大使 ドミニカと日本は83年間にわたり堅固で、建設的な関係を維持してきました。両国関係は内政不干渉、国際的相互主義および相互協力の原則に基づいています。近年の二国間貿易は中国製品の進出によりやや低下していますが、ドミニカとしてはあらゆるレベルで日本との交流の増進に努めています。今後はさらに多くの日本人がこの国を訪ずれ、ドミニカ人が日本を訪問することを期待しています。それが一層幅広く、建設的な関係の扉を開くことに貢

献するでしょう。現在も両国の企業家間で興味深い交流が行われています。我々としては日本の方々にさらに、より良く我々を知って頂くよう努力しています。

— 日本からの進出日系企業は約10社と聞いていますが、他にドミニカに進出すれば成功するだろうと思われる業種はありますか。

大使 ドミニカは開かれた経済で、世界のすべての国から資本と企業家を誘致すべく努めています。わが国は中米・カリブ地域において外国の直接投資を最も多く受け入れている国です。観光客の受け入れ数ではラテンアメリカ第3位です。現在多くのドミニカ企業が日本市場に関心を示しています。当大使館ではドミニカの企業家との意思疎通を密にし、日本の企業家とコンタクトできるよう努めています。両国間には将来的にさらに広範、かつ強固な関係を築き得る余地が大です。

— 日本はドミニカに対する主要援助国ですが、貴国の急速な経済成長にともない、最近は一般プロジェクト型の無償援助は減少していると理解しています。今後どのような分野で、どのような援助形態を期待していますか。

大使 確かにドミニカの一人当たり所得の上昇にともない数年前から一般プロジェクト型の無償援助は供与されていませんが、日本は常にわが国への連帯を示されており、ドミニカ国民は日本に対し感謝の念を抱いています。日本政府の招聘による留学生や技術研修生は増えており、またドミニカの多くの機関が日本の技術協力を受けています。当大使館としては両国の民間企業間で互恵的な協力関係を築けないか模索しています。例えば日本企業の農業分野での実験などをドミニカで行えないかと考えています。政府中心型協力と民間中心型協力をうまく組み合わせる方途はないものか知恵を絞るべきかと思います。

— 両国間関係を一層促進、発展させるためには何が必要だとお考えですか。

大使 通商関係は今後増大するでしょう。わが国の企業家は日本市場への関心を一段と高めています。我々の地域への日本の関心も最近とみに高まっています。ドミニカは中米統合機構(SICA)の一員です。日本との通商協定を締結する上で同機構は一つのキ

ーとなるでしょう。我々は日本との交流のレベルを上げるためのあらゆる可能性を探求しています。政府、民間部門、大学、NGO 等との緊密化を図っています。あらゆるイベントにおけるプレゼンスを高め、日本との関係促進に努めたいと思っています。

ー ドミニカは台湾と国交を維持し、中国とは外交関係を有していませんが、通商代表部を設置しており、貿易は活発と聞いていますが、如何ですか。

大使 わが国は現在台湾と極めて良好な外交関係を保っています。両国間の交流は日に日に増大しています。台湾政府はドミニカ国民および政府に対し強い連帯を示しています。

中国とは緊密な通商関係があります。中国製品の特質および価格もあり、近年両国間の貿易は急速に伸びています。ドミニカ政府と中国政府の交流も強化されています。現在わが国は両国ときわめて良好な関係を維持しています。

ー 米国とキューバの国交再開がドミニカに及ぼす影響はいかがですか。

大使 影響はきわめて前向きなものでしょう。わが国は米国ともキューバともあらゆるレベルで良好な関係にあります。メディナ大統領は米・キューバ間の外交関係の全面的再開に賛成してきました。今後はキューバとドミニカが共同で米国に財とサービスを提供する等により対米貿易を増大できるでしょう。我々にはキューバ国民との共通点が多々あります。米国・キューバ関係の進展に伴い、巨大な米国市場をともに享受するチャンスが増えるでしょう。

ー 最近のハイチとの関係は？

大使 ハイチ国民および政府との関係は良好です。ドミニカ政府も兄弟国ハイチを援助するため大いに努力し、犠牲を払っています。同国は現在臨時政府のもとにあり、その主要な任務は選挙を実施することです。新政府が成立し次第、両国間のさらなる緊密化を図るための話し合いが始まるでしょう。ハイチは我々の協力を必要としています。しかし仏、米およびラテンアメリカ諸国等も同国を支援する義務があるでしょう。

ー ドミニカには約 900 名の移住者・日系人が居住し、また両国間のスポーツ交流は盛んで、これまで多くのドミニカ人選手が日本のプロ野球界で活躍し

てきました。広島東洋カープがドミニカに野球アカデミーを設置しています。

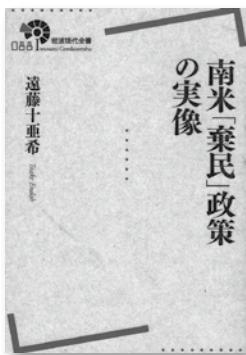
大使 わが国には各地に日本人社会があります。第二次世界大戦直後の経済困難により多くの日本人が新天地を求めて海外に出ましたが、その時わが国は日本人に対して扉を開きました。まさに本年 7 月 16 日、50 周年記念を迎えます。ドミニカ人は常に日本人に感謝しており、我々は誇りをもって“我々の日本人”と呼んでいます。日系社会は完全に我々の社会に溶け込んでおり、さまざまな分野で活躍していますが、特にラ・ベガ地方のコンスタンサおよびハラバコアで野菜や花弁栽培に従事しています。ダハボンやモンテ・プラタにもおられます。我々は日系社会がさらに大きく育つことを願っています。同時に在日ドミニカ人も勤勉でその数は 1,000 人近くに上ります。

ワールド・ベースボール・クラシックを制した国は日本とドミニカのみです。それが両国チームと選手の関係を密にしています。現在 50 人以上のドミニカ人選手が在日しています。日本人ファンのアイドル選手もいます。両国の緊密化にとって野球は有力な手段です。26 年前に広島東洋カープがドミニカにアカデミーを設立しましたが、我々は日本の他のチームにも門戸を開いています。

ー 『ラテンアメリカ時報』の読者に対してなにかメッセージはありませんか。

大使 今回このような機会を与えて頂き心より感謝します。貴協会は在日ラテンアメリカ社会にとっても極めて有益な活動を効果的に展開しておられます。今後も末永いご成功を祈っています。

(インタビュアー ラテンアメリカ協会副会長 伊藤昌輝)



『南米「棄民」政策の実像』

遠藤 十亜希 岩波書店（現代全書）
2016年5月 247頁 2,200円+税 ISBN978-4-00-029188-0

本書は南米に移住した日本人と日本国家の歴史的関係を、国家が好ましからぬ者を海外移民という装置を使って疎外した「国家による国民の差別化」であり、その上で仮想的「国家・国民」関係の中に適宜包含し、日本のモラルや伝統で教化・再統合しようと試みる、国境という空間を超えての国家による権力行使であるという。著者は、米国で学位を取り現在ハワイ東海インターナショナルカレッジの教授を務める移民政策研究者。

日本人南米移民の歴史を戦前戦後の国策としての移民支援制度、移民たちがどこから来たか、戦前の移民送り出し前夜の政治状況、政治的ガス抜き装置としての戦前移民、戦後の保守政治と南米移民を膨大な文献から丹念に辿った労作であり、戦前は地方貧農や失業者、被差別部落問題が、戦後移民は大陸からの引き揚げ者、労働組合員の探鉱離職者等が排除のターゲットになったと検証する。

著者は書名にも拘わらず「南米移民は棄民」と決めつけてはいないが、戦前戦後を通じて移民に対する国家的干渉・介入が多々行われ、遠隔ナショナリズムが作用し（例：勝ち組・負け組抗争）、国策植民会社の入植は企業移民であり、移民をコチア農協設立やセラード農業開発を含め日本の資源政策実現に協力せしめた如く述べている。しかし、これまで多くの移民史研究が明らかにしてきた移民の自助努力や自発的な創意工夫などには触れておらず、主題に合わせて論理を進めている感が拭いきれず、また地名や人名のポルトガル語読みに誤りが少なからずある。

（桜井 敏浩）



『水を得た魚 マリオ・バルガス・ジョサ自伝』

マリオ・バルガス・ジョサ 寺尾隆吉訳 水声社
2016年3月 505頁 4,000円+税 ISBN978-4-8010-0156-5

いまや「ノーベル文学賞受賞者」（2010年）という賛辞が付いてまわるバルガス・ジョサの、両親の出会いから始まる出生、幼少期と、1990年のペルー大統領選挙に立候補して圧倒的優位が伝えられながら決選投票で無名の日系人アルベルト・フジモリに惨敗するまでの回想録に、フジモリ政権発足後の92年のフジモリ大統領による“自主クーデター”についての所見を述べた追記が付されている。

すでに作家として世界的に名声を確立していたが、独裁政権下のペルーを描いた『ラ・カテドラルの対話』、軍事政権の腐敗体質を風刺した『パンタレオン大尉と女たち』などから政治を絡ませた小説を出し、74年に欧州からペルーに戻って政治問題に積極的に発言してきた彼が、87年のアラン・ガルシア APLA 党政権が行った銀行国有化に反対する運動の先頭に立ち、これが90年の大統領選挙立候補に繋がったのだが、本書は奇数章は幼少時代から作家として踏み出すまでを、偶数章では3年間の大統領選挙戦の推移を追想していく、當時バルガス・ジョサが何を考え、活動したか、周囲がどのように動き、社会情勢がどのように変わっていったかをリアルに詳しく知ることが出来る。例えば第20章でフジモリの台頭にともなって過激になった日系人への嫌がらせを批判し、第一次投票の翌日フジモリに面会を求める、市内でひそかに二人だけでフジモリが決選投票に勝つためにAPLAや左翼と手を握ることにならぬよう、決選投票の棄権を打ち合わせたことなども述べているが、自由主義への一途な信念、お人好しといわれても仕方ない性格、貧困層に好意を抱かず目を向かない姿が見えてきて、大統領選挙は負けるべくして敗れた、彼は大統領にならなくてよかったとも感じさせる自伝である。

（桜井 敏浩）

ペルー大統領選挙とクチンスキ一次期政権の展望

中川原 拓海

はじめに

6月11日午後、決選投票に残った候補の一人であるケイコ・フジモリが、「責任ある野党となる責任を国民から委ねられた。」という言い回しで、事実上の敗北宣言をしたことにより、5年に一度のペルー大統領選挙は終わりを告げた。ケイコは選挙の1年以上前から30%台の支持率を維持し、4月の第1回投票では、後に決選投票で勝利することになるペドロ・パブロ・クチンスキにはほぼ倍の差をつけていた。決選投票が僅差の争いとなることは予想されていたが、それでも決選投票の1週間前の時点ではケイコの当選がほぼ確実と見られていた。しかし、蓋を開けてみれば、票数にして約41,000票、有効得票率にして0.240%という僅差でケイコは落選した。

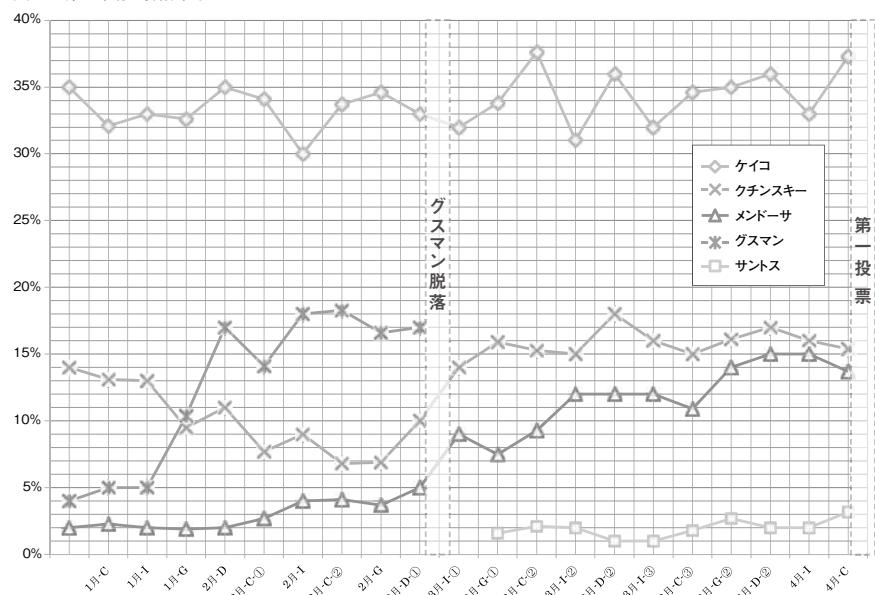
ライバルの台頭により、一時は決選投票への進出も絶望視され、キャンペーンの質も酷評されていたクチンスキが当選し、ケイコが落選した背景には何があったのか。本稿では、クチンスキが薄氷ながらも決選

投票に進出し、ケイコ有利の予想を覆して大統領に当選した経緯を振り返る。その後、駆け足ながら、2016年7月28日に発足するクチンスキ一次期政権が置かれる状況を概観する。

第1回投票：何とか逃げ切ったクチンスキ

ペルーの大統領選は一度目の投票で有効投票の過半数以上を獲得する候補がいない場合、決選投票が行われる。事前の世論調査でケイコは支持率首位を独走しており、一度目の投票で勝利はできないが、決選投票進出は確実視されていた。そのため、4月10日の第1回投票の主な関心事は、決選投票でケイコの相手になるのは誰かという点であった。2位争いをしていたのは、首相と経済財政大臣経験のあるクチンスキと35歳の若手国會議員、ペロニカ・メンドーサであった。メンドーサは南部クスコ州の出身で、母の母国であるフランスで大学に通っていた時期に、当時在仏ペルー大使館駐在武官であったウマラ大統領夫妻と知り合い、ウマラ

図1 第1回投票結果予想



注：D=Datum社, I=Ipsos社, C=CPI社, G=GfK社。円内の数字はその月の世論調査実施回数。
出所：各社ホームページ掲載のデータを基に筆者作成

大統領が後に組織する国民主義党から2011年に国會議員に当選した。

クチンスキーニーとメンドーサによる2位争いは最後までもつれた。その主な要因の一つとしては、一時破竹の勢いで支持率2位に浮上したフリオ・グスマンという候補が失格となったことにより、支持先を失った票が生じ、その票がどの候補に流入するか見通しがつきづらかった点が挙げられる。選挙序盤まで遡ると、クチンスキーニーは、10%台中盤から後半の支持率を維持していた。しかし、1月以降急伸したグスマンに票を奪われ、2月には決選投票進出が困難とされるほど支持率が下降する（図1）。逆境に立たされたクチンスキーニー陣営は、選挙参謀や広告業者を交代するなど陣営内の配置転換を余儀なくされた。3月上旬、グスマンが、党内での大統領候補選出にかかる規定に違反したことにより失格となった後、クチンスキーニーはグスマンに流れていた票を取り込み2位に再浮上するが、以前の支持率を回復する以上の上積みはできず、支持基盤の限界を露呈した。陣営内の配置転換の効果が感じられることもなく、キャンペーンに創造性が乏しい、陣営にまとまりがない、固定票を有していないといったネガティブな評価は相変わらずであった。

そんな中、グスマンの脱落で空白となった票の一部を取り込み急激に支持を伸ばしたのがメンドーサであった。メンドーサは、グスマンの去就が不透明になってきた前後から徐々に支持を伸ばし始め、3月にはクチンスキーニーのすぐ背後まで迫った。このように支持率2位に返り咲きはしたが伸びしろに限界のあるクチンスキーニーとメンドーサの勢いを比較して、メンドーサがクチンスキーニーを追い抜いて決選投票に進むのではないかとの見方が強まっていた中で第一回投票を迎えた。

結果的にはクチンスキーニーが2.31%差で逃げ切り決選投票に進むことになる。クチンスキーニー逃げ切りの主な理由としては、90年代から続く自由主義経済路線に批判的なメンドーサに危機感を抱いた有権者が、現行経済路線の踏襲を唱えるクチンスキーニーに戦略票を投じたこと、クチンスキーニーと元カハマルカ州知事のグレゴリオ・サントスがメンドーサ優位と見られていた州で健闘したこと、ウマラ大統領夫人の資金洗浄に関与していたとする疑惑が、クリーンなイメージを掲げるメンドーサにダメージを与えた、といった見方がなされた。薄氷ながらも決選投票に進んだクチンスキーニーであったが、このような戦略票の動きが示すとおり、クチンスキーニーへの純然たる支持よりも「メンドーサよりはマシ」とい

う理由により決選投票に進んだこと、また、クチンスキーニーが最多得票を得たのは全26選挙区中1選挙区（州）だけであったということから（表1）、決選投票ではケイコ有利という見方が大勢であった。

一方のケイコは、2位のクチンスキーニーにはほぼ倍の差をつけての決選投票進出が高く評価された。第1回投票におけるケイコ「勝利」の主な要因としては、2011年大統領選でウマラ現大統領に破れて以来延べ5年、今次選挙を見据えた地道なキャンペーンを継続し支持基盤を拡大してきたこと、ライバル陣営の挑発に乗らず、肅々と自分のキャンペーンに集中したこと、ケイコ批判の口実にされる父のアルベルト・フジモリ政権時代の汚職、人権侵害、強権政治といったネガティブなイメージからの脱却を図るため、フジモリ政権時代の負の側面を認め、古株国會議員の議員選再出馬を見送ったことなどが挙げられた。

表1 第1回投票結果（有効投票）

（単位：%）

| | ケイコ | クチンスキーニー | メンドーサ | サントス |
|------------|-------|----------|-------|-------|
| 全国 | 39.86 | 21.05 | 18.74 | 4.00 |
| アマソナス | 43.73 | 11.89 | 22.13 | 9.49 |
| アンカッシュ | 42.62 | 15.78 | 21.64 | 0.70 |
| アブリマック | 30.98 | 5.62 | 50.25 | 4.16 |
| アレキパ | 24.04 | 27.33 | 25.67 | 3.81 |
| アヤクチヨ | 32.37 | 6.20 | 52.77 | 1.39 |
| カハマルカ | 32.08 | 8.51 | 10.18 | 40.68 |
| カヤオ | 40.46 | 28.02 | 11.25 | 0.78 |
| クスコ | 21.76 | 9.69 | 46.65 | 5.64 |
| ワンカベリカ | 28.79 | 9.44 | 53.06 | 1.67 |
| ワヌコ | 38.97 | 13.87 | 30.06 | 0.87 |
| イカ | 44.74 | 15.91 | 17.59 | 0.76 |
| フニン | 43.44 | 21.20 | 22.45 | 1.27 |
| ラ・リベルタ | 49.43 | 13.86 | 10.40 | 2.59 |
| ランバイエケ | 50.55 | 15.91 | 10.90 | 2.73 |
| リマ | 40.56 | 29.78 | 12.03 | 0.71 |
| ロレト | 41.24 | 24.73 | 15.68 | 1.00 |
| マドレ・デ・ディオス | 44.34 | 9.35 | 25.03 | 4.20 |
| モケグア | 24.37 | 27.92 | 31.46 | 1.54 |
| パスコ | 43.45 | 22.16 | 20.44 | 0.77 |
| ピウラ | 55.00 | 12.63 | 15.41 | 3.08 |
| プーノ | 22.94 | 8.57 | 38.57 | 19.96 |
| サン・マルティン | 48.47 | 12.70 | 21.17 | 2.75 |
| タクナ | 21.04 | 15.68 | 41.22 | 4.89 |
| トゥンベス | 64.52 | 12.15 | 10.89 | 0.59 |
| ウカヤリ | 52.71 | 14.63 | 16.89 | 0.99 |

注：色つきのセルはその州で候補中最高得票を獲得したことを示す。

注：リマは（1）リマ州と（2）リマ市及び在外という2つの選挙区の合算。

注：サントスは得票率6位。4位はバルネチェア（6.97%）、5位はガルシア（5.83%）。

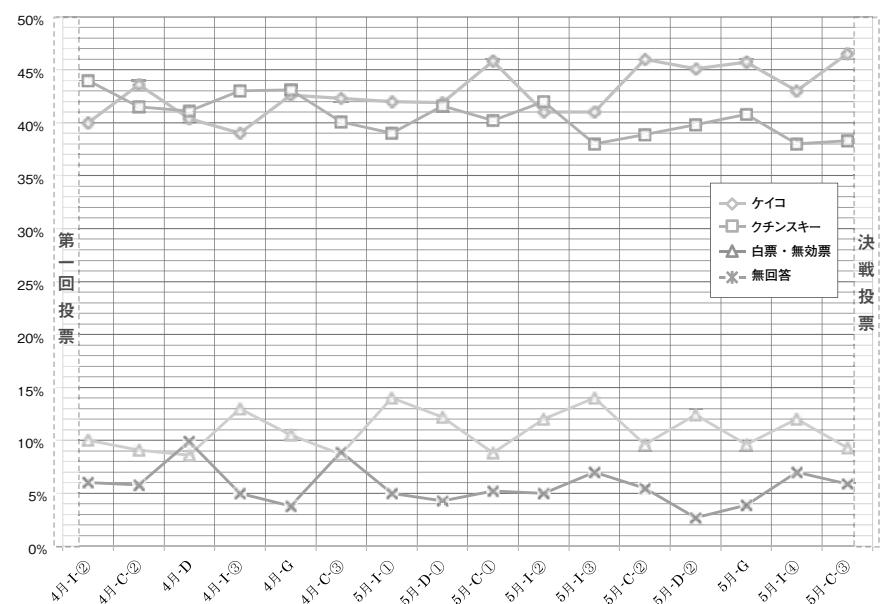
出所：ONPE（全国選挙過程事務所）のデータを基に筆者作成

精力的なケイコと汎えないクチンスキー

決選投票に入って注目を集めたのは、第1回投票まではライバル陣営の挑発に乗ることもなく、積極的に攻撃することもなかったケイコが、クチンスキーに対する攻撃的な姿勢を前面に出したことであった。加えて、クチンスキーの方が自陣に有能な人材を豊富に揃えているというイメージが浸透していたが、ケイコが政策面で期待できる著名なエコノミストを自陣に引き入れたことで、人材面でもクチンスキー陣営に見劣りすることはなくなったとの声も出始めた。このような変化があった一方で、精力的に各地でキャンペーンを行うスタイルは終始貫き、第1回投票からほぼ休みを取らず、リマ市内の貧困地域や地方を中心に選挙活動を行った。

一部世論調査では、クチンスキーの大統領当選を予想する結果も出ていたが、決戦投票に入ってからもクチンスキーのキャンペーンは改善せず、「反フジモリ」を軸に浮動票を取り込むような強いリーダーシップを見せることもなかった。クチンスキーは、富裕層と中間層からの支持ではケイコを上回っていたが、有権者人口の比率が最も高い貧困層についてはケイコが優勢であった。クチンスキーには、かねてから77歳と高齢であるが故に大統領の激務に耐えることができるかという懸念が付きまとっていたが、その懸念を払拭するようなエネルギーをアピールすることもなく、欧米系の風貌と財界エリートのイメージから、庶民層にとっては親近感を抱きづらかったことなどが不支持の理由に挙げられていた。

図2 決選投票結果予想（4～5月）



注：D=Datum 社, I=ipsos 社, C=CPI 社, G=GfK 社。円内の数字はその月の世論調査実施回数。
出所：各社ホームページ掲載のデータを基に筆者作成

ケイコが着々とキャンペーンを進め、クチンスキーに決め手がない中、5月の半ば過ぎ、世論調査でケイコがクチンスキーをリードし始め、両者の差が開き始める（図2）。この変化は、強盗や殺人事件が連日報道で大きく取り上げられたことで、クチンスキー支持になびいていた浮動票が治安対策への期待が高いケイコ支持に回ったためと分析された。この頃、それまではクチンスキー優勢であったリマ市でもケイコがクチンスキーをリードするようになった。決選投票の一週間前の世論調査では、ケイコがクチンスキーを4.4～9.6%（有効得票率）リードしており、ケイコが重大なミスを犯さない限り勝利するという雰囲気の中決選投票を迎えた。

決戦投票：なぜケイコは負けたのか

では、なぜケイコは敗れたのか。なぜ当選確実の状況からクチンスキーに逆転されたのか。直接的には、ケイコの党（人民勢力党、以下FP）幹事長の資金洗浄疑惑と同件に関するFP副大統領候補による情報操作疑惑の浮上が原因であったとされている。遡ると、ケイコがクチンスキーをリードし上昇気流に乗る陰で、FP幹事長のラミレスが、以前から疑いのあった資金洗浄疑惑で米国当局の捜査対象となっていることが報じられた。同報道をきっかけに、FPの次期国會議員の中に資金洗浄疑惑がかけられている人物がいることがクローズアップされた。クチンスキーやその協力者はこの失態に乗じて、「（資金洗浄は麻薬密輸と密接に関連しているため）ケイコが当選するとペルーは麻薬国家になる。」という強力なイメージ戦略を展開した。

この流れに拍車をかけたのが、FPの副大統領候補クリンペルによる情報操作疑惑であった。クリンペルには、ラミレスの資金洗浄を裏付ける証人の証言を虚偽に見せかけるため、この証人の発言が記録された音声データを改ざんしてテレビ局に放送させたのではないかとの疑惑がかけられた。本件の影響でフジモリ政権によるメディアを通じた情報操作が想起される結果となり、ライバル陣営が唱える「ケイコの当選はフジモリ政権の再来」というイメージに説得力を与えてしまうことになった。ケイコに対しては、以前から資金洗浄疑惑があつたにもかかわらず、ラミレスを幹事長に留めておいたりスク管理の甘さが指摘された。これらに加えて、メントーサをはじめとする元大統領候補が、ケイコの当選阻止を優先する立場からクチンスキー支持を呼びかけたこと、冴えなかつたクチンスキーが最後の最後で上記のような積極的なネガティブ・キャンペーンを仕掛け、「ケ

イコよりはマシ」という立ち位置を得たことなどが二次的な要因として挙げられている。要するに、このようなライバルによる動きはあったにせよ、ケイコ陣営の失態がなければ、さほどの影響はなく、クチンスキーの逆転勝利もなかつただろうと評されている。

おわりに—クチンスキー一次期政権が置かれる状況

クチンスキー一次期政権は、ガルシアやウマラとは違い、経済の停滞や治安の悪化という悪天候の中船出を迎える。経済と治安の改善という国民が求める課題を構造的に解決するには、国会を掌握するFP(表3)との交渉や協力は不可避と見られている。決選投票におけるネガティブ・キャンペーンの応酬でケイコとクチンスキーの間にはしこりが残っているとされているが、国民が早急な成果を求める経済と治安の改善に向けて、与野党間で最低限の合意を見出し、次期政権発足直後から素早い取組みができるかどうかが注目される。内政の安定を得るために、クチンスキーがこのような国民の要望に具体的な成果で応え、盤石ではない世論の支持を維持することで野党の圧力をコントロールしながら、政権運営に打ち込める環境を作り出すことが必要となろう。

表2 決選投票結果(有効投票)

(単位: %)

| | 第1回投票 | | 決選投票 | |
|------------|--------|-------|--------|--------|
| | クチンスキー | ケイコ | クチンスキー | ケイコ |
| 全国 | 21.05 | 39.86 | 50.120 | 49.880 |
| アマゾナス | 11.89 | 43.37 | 47.522 | 52.478 |
| アンカッシュ | 15.78 | 42.62 | 48.857 | 51.143 |
| アブリマック | 5.62 | 30.98 | 52.060 | 47.940 |
| アレキパ | 27.33 | 24.04 | 67.584 | 32.146 |
| アヤクチヨ | 6.20 | 32.37 | 48.412 | 51.588 |
| カハマルカ | 8.51 | 32.08 | 50.076 | 49.924 |
| カヤオ | 28.02 | 40.46 | 49.951 | 50.049 |
| クスコ | 9.69 | 21.76 | 64.987 | 35.013 |
| ワンカベリカ | 9.44 | 28.79 | 56.785 | 43.215 |
| ワヌコ | 13.87 | 38.97 | 49.008 | 50.992 |
| イカ | 15.91 | 44.74 | 47.221 | 52.779 |
| フニン | 21.20 | 43.44 | 48.821 | 51.179 |
| ラ・リベルタ | 13.86 | 49.43 | 38.907 | 61.093 |
| ランバイエケ | 15.91 | 50.55 | 41.146 | 58.854 |
| リマ | 29.78 | 40.56 | 50.121 | 49.879 |
| ロレト | 24.73 | 41.24 | 53.853 | 46.147 |
| マドレ・デ・ディオス | 9.35 | 44.34 | 36.275 | 63.725 |
| モケグア | 27.92 | 24.37 | 67.940 | 32.060 |
| パスコ | 22.16 | 43.45 | 50.001 | 49.999 |
| ピウラ | 12.63 | 55.00 | 38.968 | 61.032 |
| プーノ | 8.57 | 22.94 | 63.131 | 36.869 |
| サン・マルティン | 12.70 | 48.47 | 44.206 | 55.794 |
| タクナ | 15.68 | 21.04 | 68.755 | 31.245 |
| トゥンベス | 12.15 | 64.52 | 29.418 | 70.582 |
| ウカヤリ | 14.63 | 52.71 | 39.682 | 60.318 |

注: 色つきのセルはその州で候補中最多得票を獲得したことを示す。

注: リマは(1)リマ州と(2)リマ市及び在外という2つの選挙区の合算。

出所: ONPE(全国選挙過程事務所)のデータを基に筆者作成

表3 次期国会議席配分

| 会派(今次選挙で擁立した大統領候補) | 議席数 |
|------------------------------|-----|
| 人民勢力(ケイコ・フジモリ) | 73 |
| 正義・生活・自由のための拡大戦線(ペロニカ・メントーサ) | 20 |
| 変革のためのペルー国民(ペドロ・パブロ・クチンスキー) | 18 |
| ペルーの進歩のための同盟(セサル・アクニヤ) | 9 |
| 人民行動(アルフレド・バルネチャ) | 5 |
| 人民同盟(アラン・ガルシア) | 5 |
| 合計 | 130 |

出所: 6月1日付官報掲載のデータを基に筆者作成

(本稿は、2016年6月20日時点の情報を基に作成したものである。本稿の内容はすべて筆者自身の観点に基づく私見であり、所属する組織の見方を代表するものではない。)

(なかがわら たくみ 在ペルー日本国大使館専門調査員)

ブラジル ルセーフ大統領弾劾の今後

木村 元

なぜ弾劾裁判が始まったか 一ペトロプラス汚職事件

事の起りは、2014年3月のガソリンスタンド網を使った資金洗浄疑惑捜査である。これに端を発したペトロプラスを舞台とするブラジル史上最大の汚職事件がルセーフ大統領弾劾手続き開始の引き金である。これは、同社幹部が受注企業から得た賄賂を政財界等に広く配布し、与党PT（労働者党）も政権維持のために利用したとされているもので、2015年末までに計139名の経済人・元閣僚・議員等が逮捕され、今も約50名の現職・元議員の捜査が継続中である。この汚職事件に対して国民の怒りは爆発し、今年3月には約300万人の大規模な抗議デモがブラジル全国で発生するに至った。この汚職事件により政府の信頼は一気に失墜し、ルセーフ大統領弾劾へと向かっていった。ただし、ルセーフ大統領自身には捜査の手は及んでいない。正式な弾劾理由は、不正会計処理と、黒字目標の達成が不可能と知りながら国会の承認なく支出を許可したのではという財政責任法上の責任であり、国民が弾劾を要求した直接の原因とは異なっている。「不正会計処理」とは、財政責任法に基づいて設定した基礎的財政収支の黒字目標を達成するために一部の支出を翌年度に回し、一方で政府系金融機関から国民に給付したので、これが財政責任法の禁止する政府系金融機関からの借り入れに当たるというものである。

何はともあれ、4月17日、下院は弾劾裁判所設置を



汚職事件に抗議する3月13日の大規模デモ

—橋下毅氏撮影

上院に推举することを決定し、5月12日、上院は弾劾裁判所の設置手続開始を決定した。これにより、ルセーフ大統領は最大180日間の限度で停職し、テメル副大統領が大統領代行に就任して、テメル暫定政権が成立了。今後は、180日以内に弾劾裁判所が大統領を罷免するか否かを決定する。現時点では、この決定は8月から9月ではないかと予想されている。

戦後最大の不況

ところで、今回の弾劾の直接の原因は上記の通りペトロプラス汚職事件であるが、弾劾の原因はどうもそれだけではないようである。根本的には、ルセーフ政権が政財界を含む国民の信頼を失ったということであるが、信頼失墜の原因には戦後最大の不況が大きく後押ししている。ブラジルは折からの資源ブームに乗り、2011年にはイギリスを抜いてGDP世界第6位に躍り出るなど飛ぶ鳥を落とす勢いであったが、その後の資源ブームの終演により真っ逆さまに転落した。資源ブームと軌を一にして、南米では左派ポピュリズムが広がり、ばらまき政策を推進したが、ブラジルもそのうちの一つであり、03年に就任したルーラ大統領とその後を継いだルセーフ大統領の4期13年半にわたりばらまきを続けてきた。確かに、この結果、貧困層が引き上げられ、中間層が4,000万人も拡大して、ブラジル経済は包摂的成長を遂げたという積極的側面もあったが、ばらまき政策がいつまでも続く訳がない。経済政策の誤りによって現下の大不況を招いたのであるから、その責任をとれという論理であるとみられる。

ルセーフ大統領の言い分

ただし、現在のブラジルの不況は世界的な現象の一環であり、まんざらルセーフ政権だけの責任ではない。この意味では、自らの責任だけではないことの詰め腹を切らされる羽目になっている。これも最高責任者としての立場から致し方ないことなのかもしれないが、同情の余地はある。もっとも、汚職事件同様、これも正式な弾劾理由にはなっていない。自らに汚職の嫌疑

はなく、弾劾理由とされている不正会計処理さえ、どの政権でもやっていることであり、弾劾理由にはならないと大統領本人は主張している。同大統領は、今回の弾劾は、選挙で正当に選ばれた大統領を理由もなく引きずり下ろそうとしているクーデターであると述べているが、クーデターではないとしても、かつ、弾劾裁判そのものが100%司法的手続きではないということを割り引いたとしても、本当に今回の弾劾理由が弾劾の対象となる背任罪に当たるのかという点については議論の余地もある。ホフマン上院議員も、「不正会計処理で大統領を弾劾するのは、交通事故で死刑にするようなものだ」と述べている。

ここで思い出されるのは、ルーラ前大統領のマリー・ザ夫人が初めて首都ブラジリアへ行ったときルーラ氏に述べた言葉である。同夫人は、その華やかさに圧倒されて、「あきらめた方が良いわよ。あの人们は絶対この富を手放しはしないわよ。」と言ったそうである。今回の弾劾劇は、PTに危機感を持ったエスタブリッシュメントが、国民の反汚職の波に乗って推進したPT下ろしと見ることもできる。ブラジルのマスコミはエスタブリッシュメントであり、左派PTとは一度もそりが合った試しがない。考えてみれば、マスコミも経済界も初めから弾劾推進派であり、あたかも弾劾に向けて世論を誘導しているかのようであった。今回の弾劾劇が一気に進んだのは、テメル副大統領率いるPMDB（ブラジル民主運動党）が連立を離れて弾劾推進に回ったからである。世論がPMDBをさながらブラジルの救世主であるかのように扱っているのは、エスタブリッシュメントが、何が何でもPTを引きずり下ろしたいと思っていることの現れと見ることもできる。

南米のポピュリズムの終演

ただし、少し大きな流れで見れば、今回ルセーフ大統領が罷免されるとすれば、それは南米の大きな政治の流れであり、左派ポピュリズムの終演の一環とも言える。2014年の大統領選挙でのルセーフ大統領の僅差の勝利は今回の弾劾劇の前兆であり、弾劾が成立して正式に政権交代が起こるとすれば、それは起こるべくして起こった政権交代と言える。

今後の政局

さて、今後弾劾裁判がどうなるかについて、大方の見方は、弾劾が成立するというものである。6月3日

時点でのエスタード・デ・サンパウロ紙の上院議員に対する調査によれば、賛成43、反対20である。弾劾成立には2/3である54票の賛成が必要である。

大方の予想にしたがって、弾劾が成立するとし、テメル暫定政権が本格政権になるとすると、今後ブラジルはどうなるであろうか。ここで思い出されるのは、1992年のコロール大統領の弾劾である。コロール大統領の後を継いだのはイタマール・フランコ副大統領である。この政治家はなかなかの人物で、リオデジャネイロのカーニバルで、ここではちょっと書けないような格好をしたモデルを従えてパレードを見ていたということでスキャンダルになる等、型破りなところのある人ではあったが、全国的には無名の政治家であった。したがって、当時弾劾が成立したときには誰もフランコ大統領に期待していなかったが、あにはからんや、レアル・プランを成功させてハイパーインフレを収束させ、その後のブラジルの経済発展の基礎を築いたのだから驚きである。こうした前例があることも考えると、テメル政権も期待が持てる。そもそも、テメル副大統領は2018年の大統領選挙には出ないと公言しているから、怖いものなしである。いくらでも思い切った政策を打てる。しかも、弾劾が成立したならば、テメル副大統領は議会の圧倒的多数の支持を得て大統領として発進するということである。議会の最大勢力であるPMDBと、最大野党であり、かつ人材の宝庫とされるPSDB（ブラジル社会民主党）が大連立し、中道右派勢力を結集して成立する政権である。テメル副大統領の国民からの支持率は低いが、政権を交替して、何とかこの国を立て直さなければならないという意識が国民にも国会にも存在する。言ってみれば、テメル政権は成功のためのすべての条件をそろえて船出するのである。少なくとも、ブラジルが政治経済的に回復し、再び飛躍するための基礎固めはしてくれると思う。暫定政権のマイレレス新財務大臣は、年金制度、労働及び歳出額の上限設定といった改革を優先事項とする旨述べ、重要なポイントは投資の減少である旨述べた。また、経済の回復は予想より早くなるであろうと述べており、セーハ新外務大臣も、17年には経済は回復し、2%成長を達成すると述べている。マスコミにも、経済はまもなく底を打つとの論調が出てきている。

おわりに

1980年代、ブラジル人が、「ブラジルはもうだめだ」とか、「ブラジルに未来はない」等と言っていたことを

思い出す。確かに、年率3,000%に迫ったことさえあるハイパーインフレに世界最大の対外債務を抱えて青息吐息であったブラジルであったから、そう言われても仕方がなかった。それが、その後GDP世界第6位の大國に成長したのである。たとえそれがバブルであつたとしても、あの頃を知っている人にとっては、10年、20年の間には何が起こるかわからないものだと思える。ましてや、資源大国のブラジルである。食料輸出は世界一。多少近代化を怠ったとは言え、飛行機まで作る総合的な経済を持つ国である。2億人の市場を抱えるこの国は、経済政策さえ正鶴を射れば、また力強く成長する力を十分に持っている。しかも、今回の弾劾劇の過程ではっきり言えることは、弾劾のプロセスすべてが憲法の規定に基づいて肅々と行われていることである。民主主義の制度が根付いているということである。以前、破綻していたリオデジャネイロ州の財政をあつという間に立て直したレヴィー財務長官に、一体どうやって財政再建を成し遂げたのかと聞いたことがある。同長官は、当たり前な財政運営に戻しただけだと答えた。この人は、昨年末辞任したルセーフ政権の財務大臣であったが、テメル政権が当たり前な財政を回復すれば、ブラジルの再建はそれほど難しいものではないかもしれない。少なくとも、経済状態はコロール大統領弾劾の時と比べれば、ずっとましなのであるから。

(本稿の内容は筆者個人のものであり、所属する組織の見解を反映ないし代表するものではない。)

(きむら はじめ 外務省中南米局南米課地域調整官)



ブラジリアの国会議事堂—提供 あてるトラベル

中米地域統合 SICA と“地域公共財”の創造

米崎 紀夫

経済統合、地域統合というと多くの読者は、まず「欧洲連合 EU」や「ASEAN 経済共同体」を思い浮かべるであろうが、ラテンアメリカ（中南米）地域においても様々な地域経済統合の枠組みがこれまで創設されてきた。例えば、1960 年代から当該地域の主要国が参加する「ラテンアメリカ自由貿易連合 (LAFTA)」や、91 年にアルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ、ブラジルの 4 か国で創設された「南米南部共同市場 (Mercosur)」、さらには 2011 年にはメキシコ、ペルー、チリ、コロンビアの 4 か国による経済統合体である「太平洋同盟 (Alianza del Pacifico)」の設置による加盟国間のみならずアジア太平洋地域との政治経済関係の強化によりシフトした地域統合の枠組みなどの動きが活発化している。

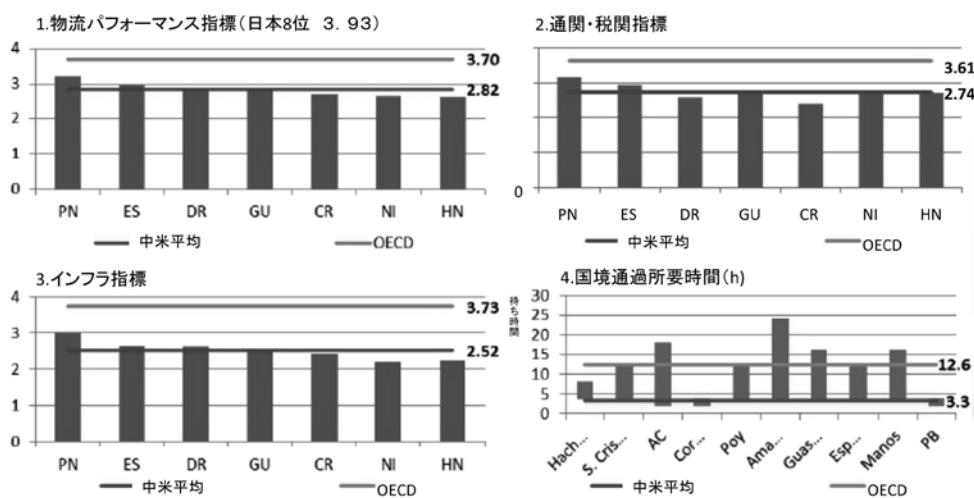
また、中米カリブ地域においては、「中米統合機構 (SICA)」、メキシコおよびコロンビアを含めた計 10 か国で構成される「メソアメリカ・プロジェクト（旧エエラ・パナマ計画、2008 年に名称組織改編）」やカリブ島嶼国および一部の南米大陸に所在するカリブ沿岸国を含む「CARICOM（カリブ共同体）」なども存在しており、各国レベルでは、複数の地域統合ブロックに様々なステータスで席を確保し、参画しており、各地域統合ブロックが単体というより、これら加盟国の参画多様性も相まって、地域統合枠組み間の連携調整

の動きも見られ、一口に中南米地域の地域統合と言つても大変複雑な構成となっている。

執筆者は、中米統合機構 SICA (Sistema de Integración Centro Americana) の事務総局 SG-SICA において、国際協力機構 (JICA) を通じた对 SICA 地域への地域レベルの協力を推進する目的で JICA より派遣されている。よって、ここでは特に SICA 中米統合機構の機能と役割や、現状と課題、また日本との関係に関する将来展望にかかる当方の論考を紹介したい。

中米統合機構 SICA は、1991 年 12 月、中米 5 カ国（グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ）及びパナマの各过大統領によって署名された中米機構憲章改定議定書（テグシガルパ議定書）により設立、本部（事務総局）をサンサルバドル（エルサルバドル）に置いて 1993 年より活動を開始。2001 年にはベリーズが、12 年にはドミニカ共和国が準加盟国の期間を経て正式加盟したため、16 年現在、計 8 か国（中米 7 カ国とドミニカ共和国）で構成される地域枠組みである。また、域内オブザーバー国としてメキシコ、アルゼンチン、チリ、ブラジルなどが、域外オブザーバーとして台湾、スペイン、ドイツ、イタリア、日本、トルコ、ロシア、韓国などの国々が参加している。SICA の設立は、国連総会によって認められており、

物流ロジスティックスの現状 中米における物流パフォーマンス LPI（OECD 諸国との比較）



出典：世銀：物流パフォーマンス指標報告書 2014

高い物流コスト

中米における貨物輸送コスト（1 トン・km）はブラジルの約 4 倍および米国の約 8 倍（世銀）

中米：US\$ 0.17/km

米国：US\$ 0.02/km

ブラジル：US\$ 0.035/km

ケニア：US\$ 0.04/km



ニカラグア・ホンジュラス間国境の混雑状況

テグシガルパ議定書が国連に記録されていることから、SICAシステム傘下の事務総局や各セクター事務局などは、国連機構と関連付けられ、国際的に援用されており、国連の常任オブザーバーとしての地位を維持している。さらにSICAは、米州機構(OAS)、アンデス共同体(CAN)、南米南部共同市場(メルコスール)、カリブ共同体(CARICOM)、カリブ諸国連合(ACS)、欧州連合(EU)などの対話・協力を保っている。

加盟各国政府が地域レベルで一体となり各種コンセンサスを形成することは、他の地域統合枠組みと同様、各国間の利害関係や対立など様々な要因から容易でないことは想像出来るが、ここでSICAの意思決定プロセスの流れを紹介しておきたい。加盟8か国間のSICA首脳会談(最高意思決定)、外務大臣会合、各セクタ大臣会合、および各国代表により構成される各セクタ地域技術委員会等のプロセスを経て地域レベルのスローガン、協定、各種ルール、コミュニケなどが承認される流れとなっている他、6カ月毎に議長国を各政府が持ち回りで担当している。これまで多くの日本人関係者やドナー関係者の間で見られた「SICA=SICA事務総局(サンサルバドル在)」との理解は間違っており、「SICA」とは中米7か国およびドミニカ共和国の計8か国による地域政治・政策的フレームワークの総称であることを理解する必要がある。

また、これら各セクタ大臣会合を運営サポートするためのSICAシステムの傘下に50以上のセクタ大臣会合事務局が設置されており、EU、台湾、スペイン、アメリカ、ドイツの所謂地域協力のトライディショナル・ドナーを中心とした「対SICA地域協力プロジェクト」はこうしたセクタ大臣会合事務局を窓口としつつ、各加盟国の代表で構成される地域技術委員会等のいわゆる多国籍軍チームとの協働活動により実施されてい



脆弱な国境通関施設

る。なお、SICAは地域統合のミッションを、経済統合、社会統合、気候変動とリスク対策、民主化と治安、地域組織強化の5本柱に分類整理の上、計43のセクタサブテーマを設定の上、各セクタ分野における各種統合活動や、プロジェクトを様々なドナーやオブザーバー国支援を得つつ実施している。

日本との関係であるが、1995年より、日本はSICA加盟国との間で毎年、政策協議(日本・中米「対話と協力」フォーラム)を実施、2005年は日・中米交流年として、SICA加盟国及び準加盟国との間で「日本・中米首脳会談」を開催し、「東京宣言」と「行動計画」が採択され、同宣言をベースにODA事業を通じ様々な広域・二国間ベースでの協力支援が行われてきた。また、2010年以降は、日本はSICA域外オブサーバー国としてほぼ毎年のペースで政策協議を開催しており、昨年15年の「日・中米友好80周年」には様々な両地域間での記念イベントが開催された他、JICAを通じた対SICA地域への地域協力の今後の展開に関する協議が行われ、SICA側のニーズに基づき4つの重点分野(物流ロジスティックス、インフラ(道路橋梁)における気候変動対策、生態系・湿地帯保全およびジェンダー平等)が設定され、SICAの各セクタ大臣会合事務局および“多国籍軍”チームとのプロジェクト形成のための情報収集等、協働作業を開始している。

さて、あらためてSICA地域を俯瞰した場合、地理的に大変狭隘な地域を複数国間で国境により細分化していること、ベリーズを除く7か国の公用語がスペイン語であり、またその文化的・歴史的背景も類似性が高いこと、さらにはSICA地域8か国の総人口はわずか5,400万人(中米7か国で4,500万人)であり、隣国のコロンビア一国にも面積、人口で及ばない比較的小規模なサブリージョンであることなどがあげられる。

つまり、EU や ASEAN、または近年注目されているアフリカ大陸における南部アフリカ開発共同体（SADAC 15 か国）や東南部アフリカ市場共同体（COMESA 19 か国）の規模感との比較においては小規模地域であり、類似性を有しながらも 8 か国間での地域統合の実現には様々な要因により至っていないのが現状である。

このように SICA 地域においては、各国特有の開発問題が存在する一方、共通した開発課題や、一国のみでは解決し難いわゆる越境問題（クロスボーダー・イシュー）が他の地域に比較して多いと言える。SICA の役割は、すなわち便益が一国内に留まる財やサービス（「国内公共財」）ではなく、便益が複数国間または一部地域に限定される「地域公共財」を産出し、地域共通の開発課題の解決プロセスを通じた地域統合と言える。（SICA が設定する地域公共財には、地域輸送インフラや地域ガス・パイプラインなどのハード財が含まれる一方、地域経済統合、地域金融安定、環境保全、感染症対策、治安維持、麻薬対策、汚職対策などのソフト財（政策、制度、ガイドライン、各種ツール、スローガン、情報システム、人材育成プラットフォーム）、国際橋等の越境インフラなど）も含まれその範囲は極めて広い。）

特に、昨年 JICA が SICA との対話を通じ協力優先分野として設定した「物流ロジスティックス」分野の課題は、まさに地域共通のクロスボーダー・イシューと言える。中米地域においてはこれまで域内関税撤廃、動植物検疫の統一化、物流ロジスティックスのマルチモーダル化構想など、様々な取り組みが、世銀、米州開発銀行、国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会（CEPAL）等の国際機関や米国、スペイン等の二国間援助を通じて実施してきた。他方、こうした努力にもかかわらず、中米域内における貿易、特に物流ロジスティックスの改善は十分とは言い難く、域内物流のコストが他地域に比べて著しく高く（中米地域 US \$ 0.17/km、米国・ブラジル：US\$0.0035/km、ケニア：US \$ 0.04/km（世界銀行『物流パフォーマンス指標報告書 2014』）、地域貿易のほとんどは陸路となること、国境税関行政の非効率性、貧弱かつ老朽化した物流インフラ（道路、橋梁、港湾、空港等）など、高い物流コストと輸送のモードを中心に課題が多い。特に、長年の各ドナーによる各種の調査や研究等の成果が有効活用されていない点、また、域内貿易の増加、パナマ運河拡張にともない期待される取扱貨物量の増加に対応するためには、従来の道路依存型から短距離海運

への代替が検討されているが、進捗は芳しくなく、また以前より検討課題となっていたロジスティックス回廊の軸となりうる鉄道建設の可能性調査も実施されていない。低迷する域内経済の成長発展のためには、従来型のインフラ整備に加え、関税撤廃や自由貿易の実現とともに、物流コストを国際標準レベルに低下させ、生産性の向上と国際価格に対する競争力の強化を図ることが急務となっている。

また、同様に地域協力優先分野として JICA が設定した「生態系・湿地保全分野」においては、中米地域は地理的、気候的な条件から、沿岸地域を含め生物多様性が豊かな反面、高いホットスポット地域となっているが、狭隘な地形における経済開発が進んでおり、生態系の劣化が進んでいる。IUCN（国際自然保護連合）が提唱し、世銀の支援を経て、現在ではメソアメリカ・プロジェクトの枠組みで保全がすすめられている「メソアメリカ生物回廊（CBM）」があるが、防災機能や気候変動緩和策としての回廊設計あるいは国境を跨る回廊としての保全の取組みは依然として遅れている。また、特定地域の詳細研究はあっても地域全体としての生物多様性・生態系概況や成功事例、教訓などの情報を体系的に整理した情報プラットフォームも存在しない。さらに、生態系保全の課題としては、持続発展的な保護管理・利用を行うための、地域住民の生活との両立や自然公園等の適正管理をともなった観光資源としての利用などがある。一方、湿地保全に関しては、ラムサール条約が 40 年以上の歴史を有しており、条約湿地の基準の設定やワイスユースの概念など、湿地保全の枠組みは一定程度確立しているものの、各国レベルでの保全活動は十分と言い難い状況にある。中米地域の生態系や湿地を保全することにより、多様な遺伝資源を継承し、地域住民の生計向上にも生かしていくためには、各国での適正な管理のみに留まらず、これを支えていくための地域的な取り組みや条約事務局等の国際的なイニシアティブとの連携が重要となっている。

SICA 地域の経済、社会、環境等の統合を支援することは、同地域の特性や国境を跨ぐ課題への対応を行うことに繋がり、日本の開発援助協力の効率性や有効性を高め、さらには将来的な日系企業の参入のビジネス環境整備につながることを期待したいところである。

（よねざき のりお SICA 中米統合機構地域協力アドバイザー）



日本人移住 80 周年を迎えたパラグアイ そして日系社会

今年 2016 年は最初に日本人がパラグアイに移住して 80 周年の節目の年となります。今から 80 年前、1936 年に日本人最初の移住者が首都アスンシオンから南東に 130 キロに在るパラグアリ県ラ・コルメナの地に入植しました。移住にあたり 11,000 ヘクタールの土地が確保され、この移住地は勤勉な日本人にふさわしい名前として蜜蜂の巣箱を意味する「ラ・コルメナ」と命名されました。同年 5 月 15 日にはパラグアイ拓殖スタッフが現地に入り、建設の第一歩を印しました。この日を日本人移住の記念日としています。

当初は言語、習慣等が異なり大変な苦労をされ、第二次世界大戦の際には敵性国民となり日本語教育が禁止される等、様々な困難があり、それらを乗り越えながら野菜や果物を生産し、それまでパラグアイの人が見たことも無かったいろいろな作物を導入し食生活をより豊かにし、地域の発展、雇用にも大きく貢献しました。今では国内随一の「フルーツの里」として知られるようになっており、ぶどう、柿、すもも、かんきつ類など多種多彩な果物が生産されています。なお、ラ・コルメナ市の市章にはパラグアイ国旗とともに日の丸が描かれています、日本国外

の市章では他に余り例が無いことだと思います。

戦前の入植地はこの一ヶ所だけでしたが、戦後は穀倉地帯である南部のイタプア県、東部のアルトパラナ県等に多くの入植者が入り、現在では約 10,000 人の日本人・日系人がパラグアイ各地で暮らししており、各移住地ではそれぞれ日本人会を作り全体を束ねる形で日本人会連合会を形成しています。多くの方が従事している農業分野においては、主力生産物の大豆は日本人が先駆けて導入し農法を研究、改良を行い、今ではパラグアイを代表する輸出產品に育っています。その他の代表的な作物としては、とうもろこし、米、小麦などが挙げられます。この中で小麦は農閑期の裏作として導入されたもので、この他にも菜種、燕麦

など多様な作物が生産されています。養鶏場や肉牛の生産に従事される方もいて、和牛も生産されています。またアスンシオン市、エンカルナシオン市、エステ市などの都市部では農產品加工、自動車販売、修理工場、金融保険、飲食店・ホテル経営、スーパー・マーケットなどの小売業など様々な分野に進出しており、また医師、歯科医師、弁護士、公証人、建築士など専門職として活躍される方も多数輩出するようになっています。

日系社会では教育にも力を入れていて、各地で日本語学校を運営し子弟に日本語教育を行い、同時に伝統文化を教えています。多くの家庭では当地の国語であるスペイン語とのバイリンガル教育を行っており、南米の中に在る日系社会の中でも二世、三世の

日本人パラグアイ移住年表

| | |
|--------|---|
| 1936 年 | 首都アスンシオンから南に約 130 キロ離れたパラグアリ県のラ・コルメナと命名された地に 4 家族 33 人が第一陣としてパラグアイに移住された。 |
| 1952 年 | エンカルナシオン近辺に位置する、フェデリコ・チャベス移住地が戦後初の移住地として開設された。入植者は 628 人。 |
| 1955 年 | 入植者 1,152 人が到着し、フェデリコ・チャベス移住地に隣接する富士地区、フラム移住地（現在のラパス）が設立された。 |
| 1956 年 | アメリカ経済振興会社（略称 CAFE 耕地）との契約雇用農として 38 家族がパラグアイの北部に移住された。これがペドロ・ファン・カバリエロ及びアマンバイ移住地の始まりとなった。 |
| 1960 年 | ピラポ移住地が開設された。1965 年までに 331 家族、1,777 人が入植し、現在でも日本人・日系人は約 1,200 人と最大の移住地となっている。 |
| 1961 年 | ブラジル国境から 41 キロ地点にアルトパラナ県イグアス移住地が開設された。現在は約 180 世帯の日本人・日系人が暮らしている。 |

田中 裕一

日本語能力は非常に高いものがあります。また現地の方の日本に対する尊敬の念は強く、日本の教育を目指している「日本学校大学」(UNIVERSIDAD NIHON KAKKO) という学校まであります。日本に留学した現地の方(非日系)が日本に感銘を受けて設立したのだそうで、現地で認可を受けた正式な大学であり、小中高校も併設されており、毎朝生徒全員で日の丸を掲揚し君が代を歌うのだそうです。

パラグアイはブラジル、アルゼンチンという南米の2大国に挟まれており、日本の方達には余り注目されていませんでしたが、近年南米諸国の中では著しい経済成長を遂げ、政治経済も安定しており、また各種優遇政策、会社設立、税制、労働法など近隣諸国と比較してメリットが多い事が認識されるようになってきました。現在では日本から進出する企業が出始めるまでとなり、既に造船、自動車部品の生産が開始され、さらに多くの日本企業から新たな進出先候補地として熱い視線が注がれています。この機会を利用してあらためてより多くの日本の方、そして日本企業にもパラグアイの魅力を知っていただき、もっと多くの企業に進出していただき、将来は南米での日本的一大拠点となることを期待しております。

さて、祝賀記念行事に関してですが、実は今まで10年毎の節目には全国の日本人・日系人が一同に集まり盛大な記念式典等を開催して参りました。ただ、残念ながら一度だけの記念行事ではなかなか日本人・日系人コミュニティ



着物ショー

一を現地社会に対して強くアピール出来るものではありませんでした。奥ゆかしく目立つ事を避ける雰囲気があったのでしょう。

今回の80周年祝賀行事を行うにあたり幾つかのポイントを考慮しています。パラグアイは親日国を超える存在とも言われており、日本と日本人に特別な敬意を抱いてくれる国です。しかしながら昨今当地においても新興国が台頭して来ており、あらためてしっかりと日本・日系をアピールしてプレゼンスを高く保つことが大切との思いがあります。また、同時に日本人を仲間として受け入れてくれたパラグアイの皆様に感謝の意をしっかりと示すことも必要でしょう。そして草分け的な初期の移住者達が基盤を築き、模範を示してくれたことに対して敬意を払い、尊重することを日系社会へのメッセージとして贈りたいと考えております。このような強い思いを込めて日本人会連合会の下、日本人移住80周年祭典委員会、その下で祭典

執行委員会を組織し、日本国大使館の協力もいただき一年を通じて様々な祝賀行事を計画、実施しております。なお、議会下院、アスンシオン市、観光庁等では法令にて今年一年を「日本年」と定めています。

一年を通じて折り紙、茶道、華道、書道、盆栽など色々な伝統文化、世界遺産となった和食の紹介、そして野球やサッカー、空手、マラソン等のスポーツ大会、音楽のイベントなどの大小様々な祝賀イベントを行っております。主なイベントとしては2月には日本の伝統の一つを披露しようと着物ショーを実施、単に色々な着物を紹介するというものでは無く、踊りやトークを織りませて誰もが楽しんで観られるショーとなりました。当日の会場は人で溢れ、外に大画面を用意して入る事が出来なかった方にはそちらで楽しんでいただけたよう工夫致しました。

また、3月にはミス日系コンテストを行いました。出来るだけ本格



ミス日系コンテスト

的なコンテストを目指し、ミスパラグアイコンテストを指導しているプロに初步から数ヶ月にわたる訓練を依頼し、日系人で現地では著名なデザイナーとして活躍されている方に衣装を発注するなど高いレベルのコンテストを実施出来るよう努めました。全国から集まつた18人の参加者の努力もあり、見ごたえのある立派なミスコンテストを開催する事が出来、その様子は地上波全国ネットで完全生中継され一般のパラグアイの方達にも大好評でした。

ラ・コルメナへの入植が開始された日は丁度パラグアイの独立記念日と同じ5月15日で、今年は市の創設80周年並びに日本人移住80周年ということでパラグアイ政府からファン・アラファ副大統領、日本国上田善久大使も列席され盛大な式典が開催されました。式典の後は市内のメインストリーにおいて各学校の生徒などが約一時間にわたり祝賀パレードを行い、午後に行われた祝賀会には約千人の方が一同に集まり、食事をしながらラ・コルメナに住む日系の皆さん、日本語学校生徒達による劇、音楽、舞踊などのアトラクションを楽しみました。

今年のイベント、活動に関して、当地のテレビ、新聞等のマスコミにも積極的に働きかけ、その結果、日本そして日系人に関して連日のように取り上げられるようになっています。この4月にはマスコミ関係者を対象にしてラ・コルメナ取材ツアーや企画したところ予想を上回る18名の参加があり、新聞紙上、雑誌などに日系人のルーツ、移住者の歴史に関する記事が多く掲載されました。マスコミ関係者に日本並びに日系社会に対する理



ラ・コルメナ創立及び日本人移住80周年記念式典



ラ・コルメナにおける祝賀パレード・市章には日の丸が描かれている

※写真は全て著者が撮影

解がより進んだように思います。

今後も年末まで様々な行事が行わる予定になっています。9月9日（金）にはアスンシオン市近郊に在る会場にて今年のメインイベントとなります合同慰靈祭・式典・祝賀会が開催される予定になっています。パラグアイに住む日本人・日系人のみならず近隣諸国の日系人代表、さらには日本からも政府関係者をはじめ多くの方が参加される予定になっています。もし参加を希望される方がいらっしゃいましたら是非ご一報下さい、大歓迎です。と一緒に祝いましょう。

10月15日（土）には「日本祭」というビックイベントを計画しています。アスンシオン市内に在るジョッキークラブという大きな会場を借り切り、屋台やブースで日本食や日本の伝統的な商品を販売すると同時に大きな特設舞台を用意してそこでは日本の祭りの再現、盆踊り、各移住地で行っている舞踊、太鼓、剣舞なども一同に

集め、実演していただく予定です。そして若者達に大人気のコスプレショー等を実施したいと計画、準備しているところです。入場者は15,000人程の規模になると予想をしております。日本の皆様にもこの機会に是非パラグアイを訪問され一緒にこの祭に参加していただきたいと考えております。

日系社会はこれから90周年そして100周年に向かってさらに前進し、日系人として誇りを持ちアイデンティティーをしっかりと保ち、進んで行くことでしょう。先駆者である永住者・一世の時代からほぼ二世・三世の時代に変わって来ていますが、若いこれから世代に対しては先祖に誇りを持って日系社会そしてパラグアイ社会ににとってリーダーとして有用な人材となって活躍していただきたいと思います。皆様には、これからも引き続きパラグアイそして日系社会に注目していただくよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、80周年の情報に関しては逐次フェイスブック上で紹介しております、こちらも併せてご覧いただきますようお願い申し上げます。

<https://www.facebook.com/jp80py/> (パラグアイ日本人移住80周年)

また、イベントに関するご質問並びに参加ご希望の方は下記にご連絡下さい。

日本人移住80周年祭典委員会
事務局長 菊池明雄
kikuchi@rengoukai.org.py

(たなか ゆういち パラグアイ日本人移住80周年祭典執行委員会広報担当)

ラテンアメリカ 隨想

あと48日に迫ったリオデジャネイロ・オリンピック。聖火の国内リレーは5月3日首都ブラジリアをスタートし、3か月間、各都市でイベントをしながらブラジルを廻っており、今日6月19日はマナウスです。公式サイト www.rio2016.com で専用アプリをダウンロードすると毎日の様子を見ることができます。

南半球で最初のオリンピックで、期待されていましたが、市民の反応は、何度も優勝したワールドカップにくらべ、オリンピックはまだそれほどの熱気はありません。大統領は弾劾裁判中、リオ州政府が資金難で非常事態宣言、あまりにも多くの工事を資金の裏付けなく始めて、まだ多くが工事中と、なんとも問題の多いオリンピックです。

ブラジル人は、大会よりもブラジルが出現する競技や、選手個人に興味を持ちます。6月15日に、選手村の31棟のビルのアパートの鍵が建設会社から引き渡され、7月より通訳などサポート組織も活動開始するので、世界206か国の選手が練習を始めて、街中で会うようになれば、盛り上がってくると思います。

競技会場建設の進行状況はWEBなどで公開されているので周辺状況をお伝えします。

玄関口、ガレオン空港の第2ターミナルの拡張と大駐車場はほぼ完成了。チェックイン・センターがAからIまで9か所になり、出発

ブラジル リオデジャネイロ・オリンピックを 機に国際スポーツ大国に

山下 日彬

ゲートがB25からB43まで完成、かなりきれいになりました。第3ターミナルは第2の出発ゲートの延長でC44からC62まで新設されて従来の2倍近くの駐機乗降ゲートを最終仕上げ中です。



第2ターミナルのチェックイン・センターがAからIまでとなった

ホテルは、ビジネスホテルが主に建設され、フランス系のACCORグループ（イビス、ノボテル、ソフィテルやメルクーレの所有者）だけでリオ市に27もできました。ビジネ



第3ターミナル全景 19駐機乗降ゲートがある

スホテルは一泊R\$100（3千円）程度から変動する料金制で、部屋に電話はなく、ポーターもいない、満室状況により料金が高級ホテルなみの日もあります。家族連れには不便だが、オリンピック後の外國客減を考えれば、この方が合理的と思われます。

ホテル協会によると市内ホテルは現在52,000室あり、IOCは最低4万室必要としていましたから、十分ということになります。5月11日現在で、88%が予約済み、イパネマ・レブロン界隈98%、バーラ地区97%の予約率のことです。



グアナバラ湾の水質は、空港の付近をみても、ゴミだらけで、汚染されていることは間違いない、水中に落ちても決して飲まないようにしてください。競技場の付近の道路は拡張舗装され、1車線が緑色の線で区切られ、送迎バスや関係車輌、タクシーなどを通す専用レーンとなります。



専用レーンには緑の線と RIO2016 のマーク

2車線の道路では、一般通行レーンは1車線のみになり、地元の交通や駐車条件は最悪になるでしょう。またバーラ地区は海岸が砂地のため、普通は舗装しても半年もすればデコボコになりますが2、3か月なら大丈夫でしょう。

6月18日の報道ではリオ州が資金難で、緊急必要資金5,700億円(190億レアル)の非常事態宣言をしましたが、財政破綻は2年前から起きていたことで、医師や教師の給料の未払い、年金の支払いが遅れたりしていました。

オリンピックは何としても決行するでしょう。会場警備は軍隊が出動するでしょうが、市や州の管轄の交通管理、会場外の警備、救急医療体制、病院などは機能しない恐れがあります。特に昨今は中国向け鉄鉱過剰生産と原油安不況で、失業率が12%を超える、失業者が急増しているので、路上強盗なども注意せねばならないでしょう。旅行者は注意が必要です。冗談抜きにして、自衛隊の

病院船が偶然リオに演習に来るようなことは期待できないでしょうか。

州としてははじめから、連邦の援助を当てにして始めたオリンピックです。ブラジル人はいつも何となるものと考えています。だが資金の目処なしに数年間も工事をしたので、工事場近辺の商業は殆ど閉鎖してしまいました。

今回はブラジリアでジウマの弾劾騒ぎ、リオ州の主要財源であるペトロプラスなどが原油値下がりの大赤字で予想が狂ったことは事実です。

道路の新計画は、リオ港付近の再開発工事はほぼ終了し、VLT(新路面電車)が走行を開始しました。



セントロに開通した VLT

道路拡張工事はサン・コンラッドからバッラへの海岸線の二車線拡張などを突貫工事中です。

2010年に始まったメトロのイパネマからバッラへの4号線の延長工事は、固い岩盤掘削や吊り橋が難工事になって、予算の3倍の3,000億円(98億レアル)もの出費になりましたが、8月1日開通の運びとなりました。

メトロから乗り継ぐ、ジャルディン・オセアニコ駅の工事は着々と進んでおり、BRT(バス高速輸送サービス)はバーラの COB(ブラジル・

オリンピック委員会)の前を通ってアルボラーダへ向かう線が7月完成をめざして突貫工事中です。



メトロ、ジャルディン・オセアニコ駅の上に建設中の BRT ステーション



アルボラーダ BRT 中央ステーション追加工事

オリンピックメイン会場からレクレイオのBRT乗り換えステーションまでは7月完成を目指して突貫工事中です。

リオ中が突貫工事ですが、建設の側がわざと工事進行を遅らせるのは、ブラジル人の常とう手段で、ぎりぎりになんとか間に合わせる特殊能力もあるのです。

連邦の追加補助金を獲得し、工事側も時間外、休日、深夜手当を要求し値上げ、資材価格も高騰し、いいなりに払う仕組みです。競技場の競技するところは完成しています



レクレイオの BRT 乗り換えステーション工事

が、周辺はがれきの山のところもあり、アクセス道路は、今、工事を開始したところさえもあります。通常は開会式の日かその翌日に完成するのが、ブラジルの不思議工法です。

6月7日に、連邦警察はデオドロ地区の複合スポーツセンターの工事現場で、26億円（85百万レアル）の公金横領を摘発と発表しましたが、いずれにしても予算オーバーしているので、開催後は、しばらく財政難、汚職問題などでマスコミを賑わすと思われます。

複雑怪奇な政府手続きに仲介人が出没する、困らせて解決料をいただくのは、日本の江戸時代の悪代官と岡っ引き時代といった状況でしょう。

9月の7日から18日まではパラリンピックが盛大に行われ、25競技、これまでの最高の5千人の競技者が参加するとのことです。これを機に

空港、BRT、VLTなどに、先進国には劣りますが、今までなかったバリアフリーの対策がとられているのがすばらしいです。

まだ開催もしていないのに、終わった後の話で恐縮ですが、オリンピック効果で、リオの大衆交通、ビジネスホテル、道路が著しく改善され障害者も住みやすくなります。なにしろこのオリンピック予算は会場費1,700億円（56億レアル）、交通手段7,200億円（240億レアル）と交通強化オリンピックです。

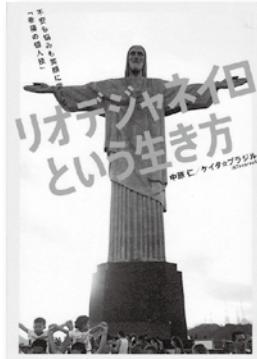
世界のいかなる紛争地域からも一番遠く、世界中の人が居住し、宗教などの対立もなく、平和に楽しく過ごせる国であることを強調して、この機に国際スポーツ大国にするのはどうでしょう。

あえて工業輸出国を目指さないで、工業は国内需要に専念し、税制などは外資がやりやすい制度にしてしまう。国家産業は資源と食品に特

化する手があると思うのです。

スポーツでは、軍、労働組合、マフィア、ファベーラ、警察、反体制団体なども、常にブラジルを応援する愛国心があるから全く心配はしていません。（2016年6月20日記）

（やました てるあき ヤコン・インターナショナル代表。リオデジャネイロ在住）



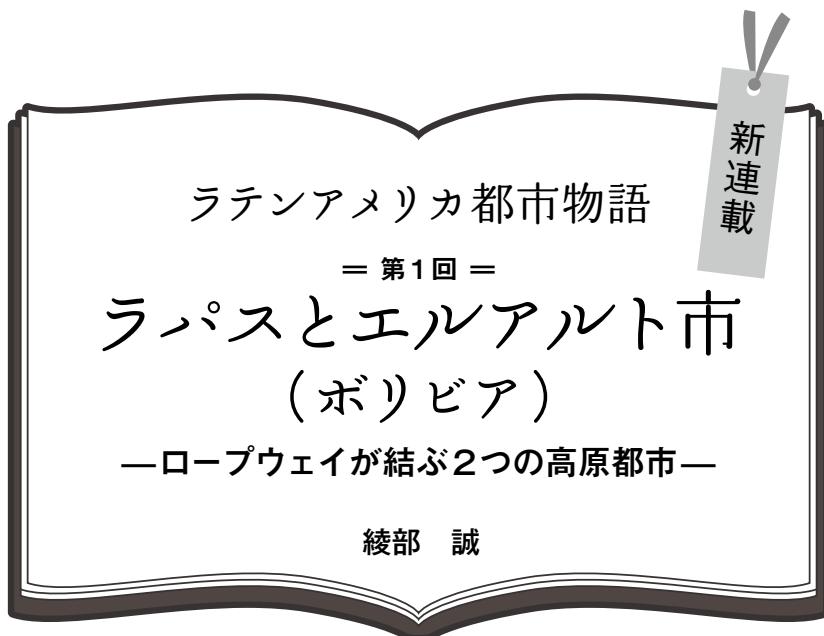
ラテンアメリカ参考図書案内

『リオデジャネイロ という生き方 —不安も悩みも笑顔に変える「幸福の個人技」』

中原 仁・ケイタ☆ブラジル 双葉社
2016年5月 215頁 1,500円+税 ISBN987-4-575-31140-2

リオデジャネイロに長年通い詰めている音楽プロデューサーと打楽器奏者の共著による、この二人ならではのリオの紹介書。そこに住むコミュニケーションの達人揃い、粹に生きるべく死ぬまでセクシーでいたいという人びと。音楽とサッカーが人生のすべてだといい、人生の可能性を決めきってしまわずにそれぞれが「幸福」の個人技をもって、自然と混然一体になった美しい都市に生きている。リオの庶民の魅力の紹介にコラム、今すぐ行きたくなった人のためのガイドも付いていて、ガイドブックや紀行本にないリオの魅力を読者に伝えている。

〔桜井 敏浩〕



筆者は1995年に青年海外協力隊の隊員としてボリビア多民族国（当時はボリビア共和国）に赴任して以来、現在に至るまで毎年、ラパス市にあるサンアンドレス大学（UMSA）において技術移転や産業開発の教育、天然資源開発に関連する人材育成に携わっている。特に近年は、日本人観光客が数多く訪問するウユニ塩湖に、世界埋蔵量の約半分程度が眠っているとされるリチウム資源を開発するための教育に力を入れている。

筆者の専門は、上述のようにラテンアメリカに関連する地政学や歴史学ではない。しかし本稿では、小生の長年のラパス市における教育活動の経験を基にして、以下にエルアルト市を含めた簡単なラパスの歴史や特徴について述べてみたいと思う。

その前にボリビアの言語について取り上げておきたいが、公式には約70%がカステジャーノ語（スペイン語標準語）、17%がケチュア語、11%がアイマラ語と発表されている（2012年の国勢調査）。ボリビア国内には、カステジャーノ語とアイマラ語、カステジャーノ語とケチュア語と、2つの言語を使用できる人も多い。特にここ10年近くは、政府の教育政策の変更により、英語などの外国语よりも、アイマラ語やケチュア語といった土着の言語習得が強く奨励されてきている。これは現政権によるボリビア人としてのアイデンティティ強化と、アイマラ、ケチュアといった言語の再評価が影響していることにある。そのため公的機関に就職する場合、これらの語学能力があるかどうかが採用基準の1つになることもあるため、ラパスでもこれらの言語習得を目指す者が増えている。

さて、ペルーならびにチリと国境を接し、ボリビア

西部に位置するのがラパス県であり、その県庁所在地がラパス市である。ボリビアは世界でも珍しく2つの首都が存在し、憲法上の首都がスクレ、行政・経済の中心地で実質上の首都と呼ばれているのがラパスである。標高3,625mに位置することから世界で最も高所にある首都としても有名である。ラパスは高山気候であるために一年を通して平均気温が低く（8℃程度）、夜間と日中の間の寒暖の差も非常に大きい。



山形大学とサンアンドレス大学の学生交流（背景はラパス市、筆者撮影）

ラパス県全体には270万人が居住しており、このうち、すり鉢状の形状を特徴とするラパス市には76万人が、同市より高地に位置し、ラパス市に隣接するエルアルト市には約84万人の住民が住んでいると言われている（2012年の国勢調査）。ラパス市は、すり鉢状の地形であるために面積が限られており、既に人口が過密・飽和状態にある。そのために隣接するエルアルト

市（高地の平地）の人口が年々増大し、居住地も徐々に遠方へと広がっている。現在のボリビアの人口は約1,080万人程度と推計されており（2015年）、この数値を基に計算すると、ラパス市の周辺都市部（含むエルアルト市）には約15%程度の人口が集中していることになる（ちなみにボリビアの面積は日本の約3倍程度である）。

ラパス市は、その形状ならびにアンデス山脈を背景に壮大な街並みを有していることから、2014年にはNew Seven Wonders Foundationが選ぶ「世界で最も美しい7大都市」の1つに選ばれている。

元々、ラパス市はアロンソ・デ・メンドーサ（Alonso de Mendoza）によって1548年10月20日に設立された。インカ帝国の支配を進めていたスペイン国王であるカルロス1世から委任を受けたペドロ・デ・ラ・ガスカ（Pedro de la Gasca）の命令を受けて作られたものであり、ペルー征服が完了したことを記念しての新都市の建設であった。この場所に町を建設したのは、ポトシとクスコの中継地点にあり、旅人が休憩をとるのに最適な場所であると考えられたからである。この都市の正式名称は、ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・パス（Nuestra Señora de La Paz）、日本語で「我々の平和の母の町」と名付けられた。建設当初、この町は現在のラパスから西に位置するラハという地域に造られたが、アルティプラの強い風の影響や、当時、いまのラパス市がある地域に小川が流れしており、小規模ながらも金を産出していたこともあり、現在の位置に町を移

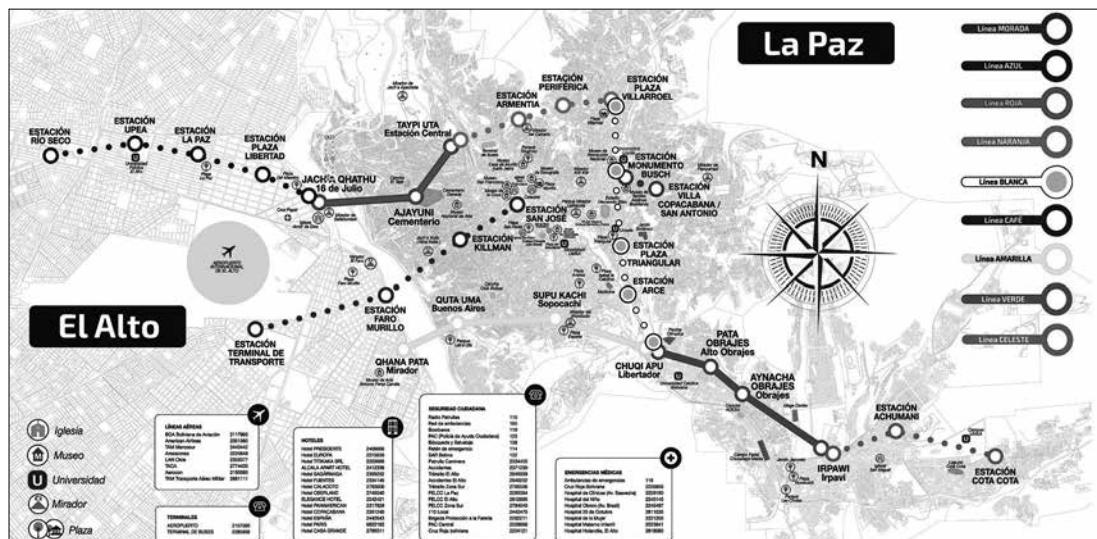
動した。以後、このラパス市はスペインの強い影響下に置かれ続けることになった。

その後、1781年には原住民による革命が起こり、リーダーであったトゥパク・カタリ（Tupak Katari）の指示のもと、約6ヶ月間、主としてアイマラ系住民がラパスを包囲し、教会や政府の所有物が破壊された。これはスペインによってこの地が事実上の植民地とされ、原住民が奴隸のように扱われ、過大な税の取り立てや植民地政府の不正に対する不満が鬱積し、これらを理由に白人層の多くが住むラパス市の占拠に繋がったとされている。その後、20年以上の月日を経て、今度はラパス革命が勃発する。1809年7月16日にペドロ・ドミニゴ・ムリージョ（Pedro Domingo Murillo）によって革命が起き、スペインからの実質的な独立への道が始まり、その後、アントニオ・ホセ・デ・スクリ（Antonio José de Sucre、ボリビア共和国の初代大統領）によるアヤクチヨの戦いにおける勝利を経て、ラパスは1826年1月23日にチュキサカ、ポトシ、サンタクルス、コチャバンバとともに正式に市として位置づけられることになり、1898年に事実上の首都となった。

他方で、ラパス市北西部に位置するアルチプラノ（高地にある平地）に位置するのが、エルアルト市である。この都市は、他のボリビアの主要都市と比較すると新しく、標高は4,150mに位置している。人口規模は最近の統計では、ラパス市の人口を超えたという報告もなされており急拡大をしている都市でもある。

元々、エルアルトはボリビア政府がペルー、チリと

図1 ラパス市とエルアルト市の地図およびロープウェイの建設予定



※実践部分は既に完成しているロープウェイ、破線部分は建設予定の路線を示す。

（出典）Ministerio de Comunicación (<http://www.comunicacion.gob.bo>) より引用。

の間に鉄道を敷設し、これを機に徐々に人口が増えてきた町である。鉄道事業による人口の増加に加えて、1923年にはエルアルト国際空港が建造され、これに従事する住民なども居住するようになった。チャコ戦争後には土地所有に関する制度を利用して地権者が増え、1953年には農業改革に関する法律が発布され、無秩序で政府のコントロールが効かない状態のなかでさらに移住者が増加した。

このように人口が徐々に増加するなかで、住民達は地区委員連盟を組織して、エルアルト地域の自主・独立を政府に対して主張・要望したがかなわず、1970年の大規模な住民運動を経て、1985年に正式にエルアルトに関する法律が制定され、同市および周辺区域がラパス市から行政的に分離されることが決まった。現在のエルアルト市は、大規模な工場が多く立地しており、商業製品の取引・売買等で経済活動が活発な町となっている。また農村部からの移住者も年々増えており、人口増加率は他のボリビアの都市と比較しても非常に高い。

ラパス市とエルアルト市の特徴としては、ラパス市内の低地（Zona Sur）には高所得層が数多く居住しており、高地に行けば行くほど、さらにエルアルト市の郊外に行けば行くほど低所得層が暮らすという傾向が見受けられる。しかしモラレス政権誕生後は、原住民系住民のなかにも高所得者が増えており、エルアルト市内の至るところに派手で豪華な5階建てぐらいのビルが点在するようになっている。Zona Surにあるカラコト地区には昔からある高級住宅街に加えて、新たに建設された高層ビルも立ち並んでいる。巨大なショッピングモールや、10以上のシアタールームを有するで



ラパス市内の中心部（セントロ）の風景（筆者撮影）

あろう巨大シネマも、町のなかに複数存在し、営業を行っている。

筆者が初めてこの地に立った22年前と比較すると、ラパス市の中心部については、信号があちこちにでき、店が入れ替わった程度の変化しかあまり感じ取れないが、エルアルト市の郊外や南東部にある高級住宅街に一歩足を踏み入れると、その発展ぶりには驚くものがある。低地の高級住宅街には、お洒落なレストラン、バー、ブティック、ショッピングモールが新たに開業し、エルアルトでは、昔は何もなかったアルティプラの大地に、レンガでできた住宅が林立し、巨大な町が新たに形成されている。このような変化からも、ボリビアの近年の天然資源の輸出を背景とした経済発展の力強さと、国民の所得向上の勢いを感じることができる（ちなみに政府発表によると2006年以降の平均的な経済成長率は年換算で4.8%と高い値を示している。しかし昨年から始まった天然資源価格の下落は今後の同国の経済に大きな影響を与えるであろう）。

ラパス市は、ボリビアの中でも商業の発展している地域である。ラパス市から離れてアルチプラノに移動すると、ジャガイモ、キヌア、麦などを、また低地のウンガス地域に行けばパパイヤやオレンジなどの果物やコーヒー豆の栽培などが昔から盛んであるが、ラパス市内だけを見ると、行政機関、銀行、民間企業等のオフィスビルが林立・集中しており、正にメトロポリタンという名称に相応しい様相を呈している。

市内は、いまも古い形式のマイクロバス、ミニバス、タクシー、テウルフィー（区間乗り合いタクシー）などで大渋滞は当たり前であるが、近年は交通渋滞の緩和のために導入された日本の都市部にもあるようなブマ・カタリという市内循環バスやロープウェーが人々の移動手段に加わっている。特に市内を横断するロープウェーは値段も安く（1回の利用で45円程度）、渋滞による遅延も生じないために、いまやラパスとエルアルトの両市民には欠かせない交通手段の1つとなっている。現在は赤・黄・緑の3路線が開業しており（赤路線：16 de Julio（エルアルト）～Estación General（ラパス）、黄路線：Mirador（エルアルト）～Libertador（ラパス）、緑路線：Libertador（ラパス）～Iravapi（ラパス））、政府の計画では今後、9路線まで増設し、エルアルト郊外とラパス市内を結ぶ路線、ラパス市内を縦断する路線を新設する予定であり、利便性の拡充を目指している。通常、多くの国々では、ロープウェイは観光地やスキー場などで用いることが一般的であり、



ラパスとエルアルトを繋ぐロープウェイ（筆者撮影）

交通手段として用いることはあまりない。加えてロープウェイから見ることできるラパス市内の絶景は壮大であることから、いまでは外国人観光客には欠かせない観光スポットになっている。

ラパス市は製造業が23%、商業が23%、サービス業が54%を占めており、サービス業の比重が高い。一方のエルアルト市は商業が35%、サービス業が32%、建設業が20%、製造業が13%となっている。ラパスならびにエルアルトの両市では、約85%が従業員4名以下の零細企業に勤めている。特にエルアルト市は、インフォーマルな職業も数多く（例えば露天商）、近年は地方から流入する人々の高い失業率が社会問題となっている。農村部での生活を諦めて商業の盛んな首都圏郊外に移り住んだものの仕事がなく、犯罪に手を染める者も多い。確かにモラレス政権になってからは、貧困撲滅を旗印に母子や子供に対する支援制度が拡充されてはいるものの、エルアルトにおける根本的な失業問題は、解決にはまだ道が程遠い。

人々の気質については個人的な意見になってしまいますが、これまでにボリビアで知り合った人々、知人や友人、山形大学で数多く受け入れてきた同市出身の留学生の性格から観察すると、ラパスの人々は非常に真面目で、コツコツと仕事・努力をする者が多いという印象を持っている。またとても純粋で親切な人が多いという印象も変わりなく持ち続けている。このような気質や性格は、日本人にもよく似ていると感じている。

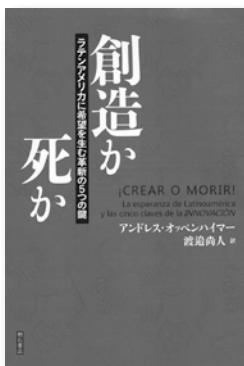
以上、ここまで私見という立場で、エルアルト市を含めたラパス市の概要について述べてきた。ラパスは日本から非常に遠く、また標高も高い都市である。近年

はウユニ塩湖を訪問する日本人観光客も多くなっており、その中継地点となっているのも同市である。このラパスという町に、一人でも多くの日本人に滞在してもらい、その魅力と迫力を堪能し、人々の温かさにも是非、触れてもらいたいと願っている。

（あやべ まこと 山形大学学術研究院・准教授、サンアンドレス・ボリビア国立大学客員教授）

（参考文献）

- Carlos Gisbert “ENCICLOPEDIA DE BOLIVIA” OSEANO.
- José de Mesa Teresa Gisbert, Carlos D Mesa Gisbert “HISTORIA DE BOLIVIA” Editorial Gisbert y CIA SA. LA PAZ, 2003.
- 真鍋周三『ボリビアを知るための73章』明石書店、2013.
- Municipio de La Paz “diagnóstico, estructura e indicadores de empleo” 2013.
- Municipio de El Alto “Estadística del Registro de Comercio de Bolivia” 2016.
- Instituto Nacional de Estadística 2012
(<http://www.ine.gob.bo/>).



『創造か死か－ラテンアメリカに希望を生む革新の5つの鍵』

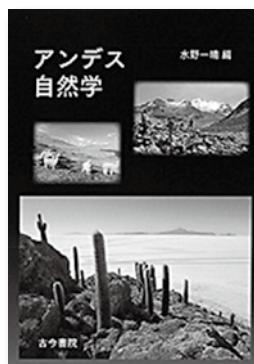
アンドレス・オッペンハイマー 渡邊尚人訳 明石書店
2016年4月 383頁 3,800円+税 ISBN978-4-7503-4340-2

本書はマイアミ・ヘラルド紙の名物コラムニストでピューリツツアー賞受賞者、米州で絶大な人気を誇るジャーナリストのアンドレス・オッペンハイマーの『米州救出』(2011年 時事通信社)、『ラテンアメリカの教育戦略』(2014年 時事通信社)に続く、ベストセラーの初の邦訳。

21世紀の発展の柱である革新と創造につき、米州での驚くべき現状につき紹介している。マイクロ・ソフト創始者ビル・ゲイツや冒険企業家リチャード・ブランソン、反転学校のサルマン・カーン、ペルー革新料理人アクリオ、革新的サッカー監督アルゼンチン人グアルディオラ、社会的起業家チリ人ゾレッジー、コンピューターの認証文字発案者グアテマラ人フォン・アン等世界的革新者達とのインタビューを通じ、その革新の秘密を明らかにしてゆく。そして、なぜ中南米にビル・ゲイツやステイーブ・ジョブズが生まれないのかにつき考察し、中南米の潜在的創造力と革新を開花させるための5つの秘訣(失敗を容認する革新文化等)を引き出す。本書は、“創造と革新”を切り口に、北米から見た米州の知られざる状況を複眼的視点から紹介しており極めて興味深い。

著者の米州に関する考察は、これまで実にラテンアメリカの現実に驚くほど当てはまってきた。過去に執着し未来を見ず、国威発揚のために国家の英雄の墓を掘り起こし、イデオロギーに固執し、教育を国際化せず、天然資源に依存し続けるラテンアメリカの国々は、教育、科学技術、革新の知識経済時代にますます後れを取るだろうとの考察は、現在凋落傾向にあるラテンアメリカの強権イデオロギー的な国々にとっては、まさに現実のものとなっている。本書は、ほぼ15年毎に左派と右派、自由市場経済と国家主導経済との間を振り子のように揺れ動くラテンアメリカが真に発展の地域となるための多くのヒントと助言を提供している。

(訳者 渡邊尚人)



『アンデスの自然学』

水野一晴編 古今書院
2016年3月 228頁 4,300円+税 ISBN978-4-7722-2021-7

アンデスという特定の地域を取り上げた自然の概説書。アンデスの地形・地質、気候、土壤、植生・環境帯、土地利用、気候的特徴と近年の気候変化、氷河変動と古環境変遷、土壤や植生の発達や植生遷移、分解菌類や微生物、アンデス高地に広がる欧州の植物やアンデスの自然と牧畜社会に至る事例研究、さらにアンデスとの比較で東アフリカのタンザニア、ケニアの牧畜民と農耕社会との共通性と違いを示した総合的な自然概説書。

地理学、農学、植物学、歴史気候学、菌類・微生物学等のフィールド調査経験豊富な20人の研究者が執筆しており、アンデスを知るための基礎的な知識が得られる。

(桜井敏浩)



『物が落ちる音』

ファン・ガブリエル・バスケス 柳原孝敦訳 松籟社
2016年1月 314頁 2,000円+税 ISBN978-4-87984-344-9

1995年、コロンビアの首都ボゴタのビリヤード場で法学の専任教員になったばかりの私はリカルド・ラベルデと出会い付き合うようになった。小型機の元パイロットであり、20年近く服役していたようで、米国人の妻エレーナ・フリットツが居るということぐらいしか素性は判らない。この年の12月にマイアミを発ってカリに向かったアメリカン航空が、墜落し乗客の大部分が死亡する事故が起きている。翌年早々会った時、リカルドは持ってきたカセットテープを聞ける場所を尋ねられ、詩歌会館で聞けるように取り計らい、その後一緒に歩いていた街頭で彼は殺し屋に射殺され、私も重傷を負う。

2年半後、リカルドの居た家を訪ねた私は管理人が保管していたカセットテープを聴くことを許された。それはエレーナも搭乗していた墜落機のボイスレコーダーで最後の瞬間の操縦室の声が聞こえた。その後もなく管理人に残した私の電話番号の留守録に地方の山地に住む女性の伝言が入り、彼女、マヤ・フリットツを訪ねることにした。マヤこそエレーナとリカルドの間に生まれた忘れ形見で、母が米国の平和部隊に参加してコロンビアに来て、そこでリカルドと知り合い愛し合うようになって結婚したのだが、実はリカルドは初めは大麻の飛行機輸送でそこそく財を得、最後には1回だけとの約束でコカイン密輸のため飛行した際に麻薬取締局に逮捕され服役していたことを知る。当初メキシコ経由だったのが、ニクソン大統領の麻薬戦争宣言でルートがコロンビアに移されたのだが、そのメキシコ、コロンビアに滞在経験をもつ一部の平和部隊員が仲介役として暗躍し、リカルドもその一人に利用されたのだと判る。

希望と善意に溢れた青年達により構成された平和部隊の一部が麻薬の供給という国家に敵対する活動に関与していたという衝撃的な事実を交え、不慮の死を遂げた関係者の人生を再構築して辿るという小説の面白さを堪能できる。

〔桜井 敏浩〕



『ブラジル雑学事典』

田所 清克 春風社
2016年3月 438頁 5,000円+税 ISBN978-4-86110-496-1

40年あまりブラジル地域研究、ブラジル文学の研究を続けてきた田所京都外国語大学教授が、これまでの多岐にわたる分野の論考を一人でまとめたブラジル学事典。

自然と社会、アマゾン、パンタナールやリオデジャネイロを述べた「地理」、ブラジル“発見”からアフリカ、先住民に根差した社会思想に至る「歴史」、新たな文化・文明に参画する民族集団としての日系等についての「移民(史)」、「経済」「社会」、カーニバルを例に「民俗」、欧州・アフリカ系・人種混交の「民族」、日系ブラジル人を例にした「教育」、そして著者の得意分野である「文化」では、「言語」としてポルトガル語、インディオの言語、ブラジル「文学史」、「文学論」、「作品論」を詳述し、それに「音楽」、カポエイラやサッカーの「スポーツ」、「飲食文化」も解説している。加えて様々なテーマの「隨想」、ブラジル学のための短い解説を付した「文献」リスト、ブラジルについての知識の広さを窺わせる24の「コラム」が収録されていて、政治経済解説とは違った、著者ならではのブラジルの解説を楽しみつつ、ブラジルをいろいろな角度から理解するに資する雑学集大成である。

〔桜井 敏浩〕

協会主催の講演会・セミナー・懇談会にご参加ください

毎月、ラテンアメリカ協会は講演会・セミナー・懇談会などを開催し、ラテンアメリカの政経文化の最新事情の提供と日本とラテンアメリカの相互理解の向上に努めております。新規プログラムは都度、当協会ホームページの「講演会・セミナーのご案内」および「イベント・カレンダー」に掲載するとともに、会員向けのメールマガジン(新着情報)でお知らせしております。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

＜最近のイベント＞(詳細は協会ホームページのイベント欄をご覧ください。)

2016年

4月15日 講演会「アジア太平洋自由貿易圏(FTAAP)実現に向けた道筋」
- 2016年APECペルー首脳会議を控えて 亀崎 英敏 ABAC日本委員
4月25日 講演会「わが社のラテンアメリカ戦略」第3弾
「ラテンアメリカを身近にー観光と翼を広げてー」
全日本空輸(株)国際提携部 矢吹 敦部長
(株)ジェイティービー グローバル事業本部
増本 齋担当部長



全日本空輸・JTB講演会

4月27日 キューバ外務省ペレイラ組織企画情報分析局長とのラウンドテーブル



キューバ外務省ペレイラ局長とのラウンドテーブル

5月12日 世界銀行 ウィリアム・トーレ
ラテンアメリカ・カリブ海地域担当チーフ
エコノミストとのラウンドテーブル
5月13日 講演会「日系人をグローバルビジネス戦力に」
(合) イデア・ネットワーク ファン・アルベルト
松本代表取締役
武藏大学社会学部アンジェロ・イシ教授
6月22日 講演会「キューバ共和国の最新情勢」
渡邊 優 駐キューバ大使



渡邊駐キューバ大使講演会

6月28日 講演会「時代を超える地場に定着する企業群」第5弾
「ラテンアメリカのICT・物流インフラ構築を
先導する日本企業」
日本電気(株)米州・EMEA本部 前谷謙二郎中南米部長
日本通運(株)海外事業本部グローバルフォワーディング
企画部 田辺 真人次長

ラテンアメリカ・カリブ研究所レポート

今年3月から7月まで、本研究所では下記のレポートを協会ホームページで発表しました。「研究所」サイトから「研究所出版物・関連資料」にお進み下さい。お読みいただくなためには会員登録が必要です。

- ・ペルー大統領選挙の結果を読むークチンスキーポリシーの課題
- ・外務省による「海外進出日系企業実態調査」・「海外在留邦人実態調査」から法人企業数、在留邦人の動向
- ・太平洋同盟追加議定書が発効ーニュージーランド、オーストラリアがFTA締結に動く
- ・オバマ米大統領、歴史的なキューバ訪問ーその意義と成果
- ・ボリビア:国民投票で大統領連続再選を拒否ーモラレス政権の行方

広告掲載のお願い

ラテンアメリカ協会では年4回『ラテンアメリカ時報』を発行し、ラテンアメリカ諸国の最新情勢分析や政経文化トピックを掲載、内外の皆様から国内唯一のラテンアメリカの専門誌として高い評価を得ております。この数年、ラテンアメリカへの関心の高まりを背景に、発行部数は着実に増加し、現在、約600部に達しています。この『ラテンアメリカ時報』を貴社の商品及びサービスの情報源の一つとしてご活用いただけると存じます。広告掲載料金は下記の通りです。掲載のご検討をお願い申し上げます。

| | |
|----------------------|--------------|
| 広告掲載料 A4・1ページ 裏表紙カラー | 120,000円/年4回 |
| 表紙裏及び裏表紙裏 カラー | 100,000円/年4回 |
| 同 モノクロ | 60,000円/年4回 |
| 本紙1/2ページ モノクロ | 40,000円/年4回 |

ラテンアメリカ協会の活動と入会のご案内

○『ラテンアメリカ時報』の発行（年4回発行）

ラテンアメリカをめぐる最新の話題と課題をいち早く捉え、分析することで、日本におけるラテンアメリカに関する最も充実した定期刊行物。

○ウェブサイトでの情報提供

ホームページは、わが国随一のラテンアメリカに関する総合サイトとして、各国概況、ニュース、記事、イベント情報、新刊案内、リンクなどから成る最も充実したトップサイト。

会員専用ページでは最新の評論（マイアミ・ヘラルドの「オッペンハイマー・レポート」などを毎週更新）、関連ニュース速報、『ラテンアメリカ時報』既掲載記事ほかがダウンロード可能。さらに充実中。

○講演会・ワークショップの開催

国内、ラテンアメリカ諸国の関係者を招き、講演会、セミナー、ワークショップを開催するとともに、各種調査、研究活動を行っています。

会員の特典

- 『ラテンアメリカ時報』の無料配布
- 協会サイト全ページへのフリー・アクセスとダウンロード
- 協会主催・共催セミナー、シンポジウムへの優先ご案内
- メールでのラテンアメリカ・ニュースレターの配信

入会方法

協会サイトからお申し込み頂くか、
事務局へメール info@latin-america.jp もしくは
03-3591-3831（電話切り替え）へFAXでご連絡下さい。
※法人会員は同一ドメイン名の複数の方が、サイトへフリーアクセスできます。
※在外会員への会報は、サイトでの閲覧となります。

| | |
|--------|---------------|
| 法人会員 | 50,000円（1口以上） |
| 個人会員 | 8,000円（1口以上） |
| 在外会員 | 4,000円（1口以上） |
| 国別団体会員 | 10,000円（1口以上） |
| 賛助会員 | |
| 駐日大使館等 | 10,000円（1口以上） |
| 学生 | 5,000円 |

（注）すべて4月～翌年3月までの間の一口年額。「駐日大使館等」には、総領事館、国際機関とこれに準ずる駐日代表部等含む。

『ラテンアメリカ時報』次号予告

次号 2016年秋号(2016年10月25日発行予定)は、「**特集：キューバ観の変貌**」です。キューバと米国は2015年7月外交関係を再開、16年3月20日にはオバマ大統領がキューバを訪問しましたが、キューバ自身は社会主義体制堅持を謳っていて、その政治・経済の仕組みも変わってきたとは未だ言えないようです。しかしながら、キューバを見る周囲の目は変わりつつあるのは確かで、米国・欧州・日本などから見たキューバ観の最新の動きをいろいろな切り口から解説します。

「**駐日ラテンアメリカ大使インタビュー**」は、今回はそのキューバの隣国でもあり、カリブ海観光で人気が高くレゲエなどの音楽が魅力としか知られていないジャマイカの、それだけでない魅力を伺います。

「**ラテンアメリカ時事解説**」は、キューバとも関係の

深いニカラグア、ドミニカ共和国の大統領選挙結果、コスタリカと中米統合移民政策の可能性など、ラテンアメリカでの政経・社会情勢の最新の動きを解説します。「**33カ国リレー通信**」は現地からならではの報告で、 ブラジルの政経混迷の中で生きる人々を、識者による幅広い話題のエッセイ「**ラテンアメリカ随想**」、新連載「**ラテンアメリカ都市物語**」の第2回は、オリンピック・パラリンピックが開催されたリオデジャネイロです。

様々な分野の新刊書を紹介する「**ラテンアメリカ参考図書案内**」はラテンアメリカを知るための情報源です。これらが累積されているWebサイトの「関連情報」→「**図書案内**」とともに有用なデータベースともなります。



佐藤・堀法律事務所では、中南米を知り尽くした弁護士永吉慎介が、クライアント様の中南米でのビジネスをお手伝いさせて頂きます。

弁護士永吉慎介は、コロンビア、グアテマラ、ブラジル、中国、フィリピン等に在住経験があり、スペイン語、ポルトガル語共にネイティブと変わらないレベルで運用ができます。

英語、スペイン語、ポルトガル語、中国語で、事実の調査から法的な交渉まで、行うことができます。

中南米のよいところも悪いところも知り尽くした当事務所に、クライアント様のお手伝いをさせて下さい。

佐藤・堀法律事務所

佐藤・堀法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座
2-3-19 銀座深田ビル4F(執務室)
TEL: 03-5524-1110
FAX: 03-5539-4701
E-mail: lawsn@shinchi.cc

『ラテンアメリカ時報』通巻 1415 号 2016 年夏号

2016 年 7 月 25 日発行 定価 1,250 円
年4回(1,4,7,10月)発行

発行所 一般社団法人 ラテンアメリカ協会

〒 100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 1 階 120A
Tel. / Fax : 03-3591-3831
E Mail : info@latin-america.jp
URL : http://www.latin-america.jp/

発行人 佐々木 幹夫

編集人 桜井 敏浩

印刷所 (株) アム・プロモーション